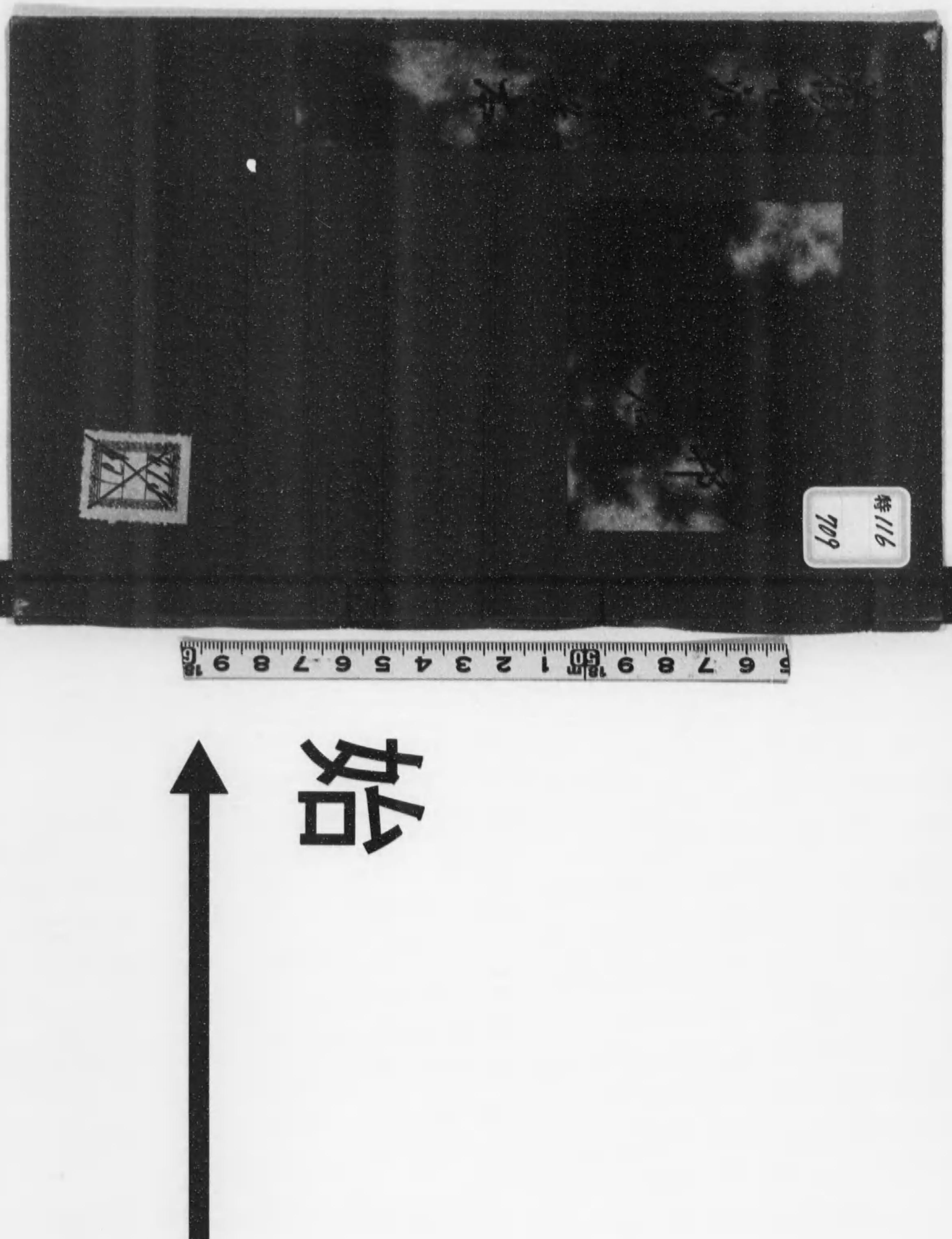

特116
709

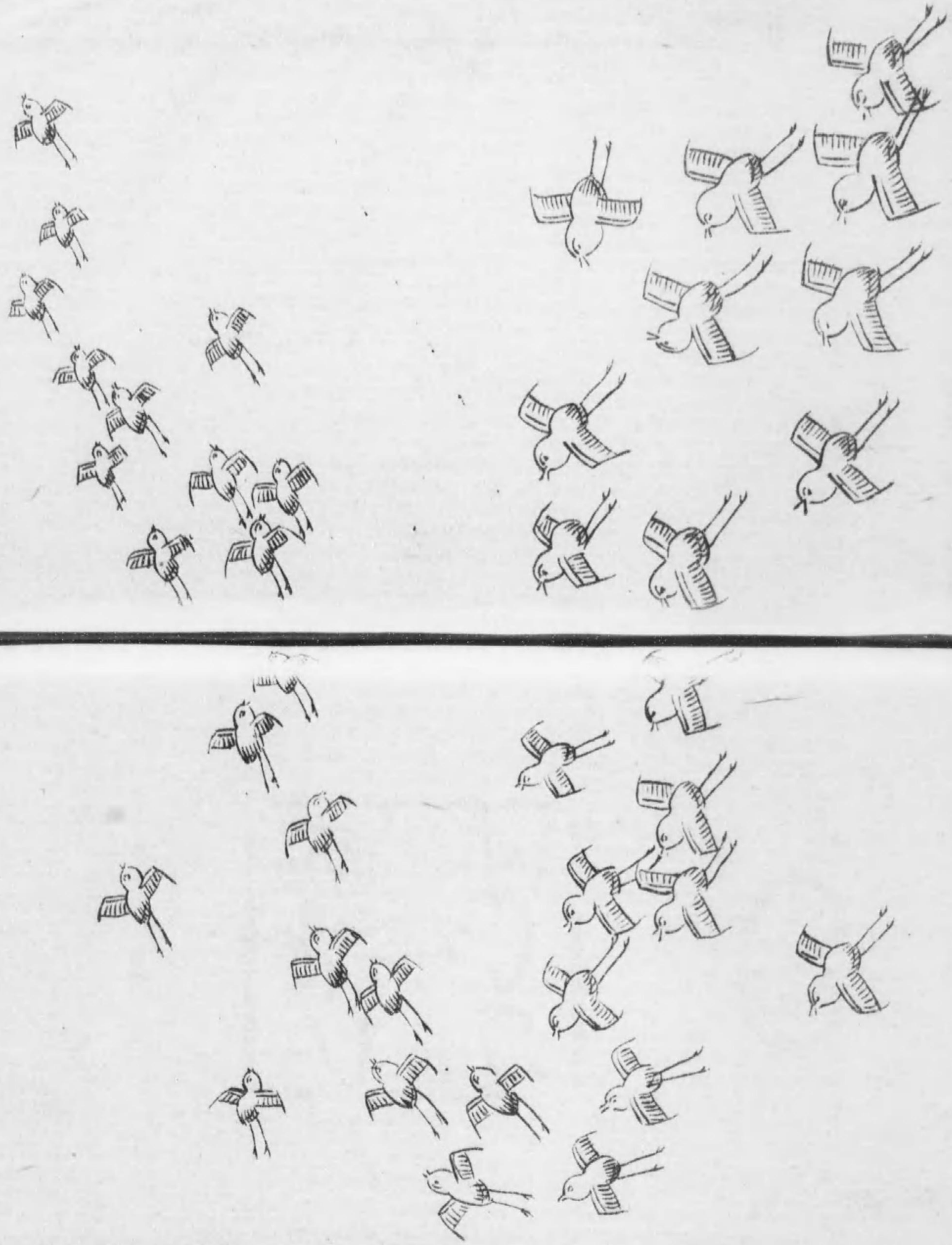
觀世流改訂謠本

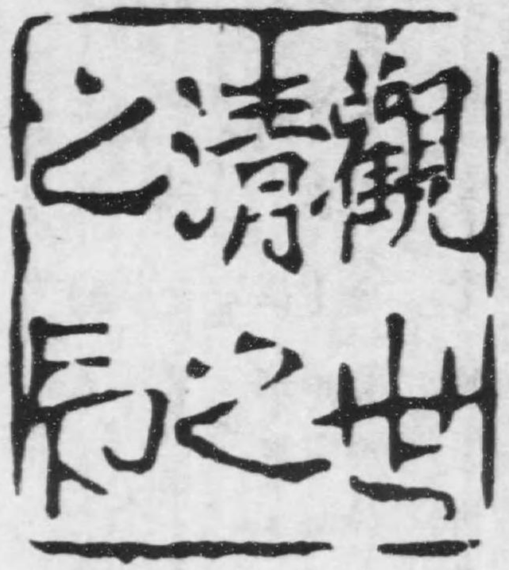
内二十

郡郭
教生石
野宮
錦本
唐船

特116
709

775





大正
10 12.27
内交

文學博士

明治四十年

井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

大正五年

丸山時樂堂 拍子附訂正
観世流謡曲刊行會 節附様式統一

大正十年

山崎樂堂 拍子附再訂正

邯鄲

解題

古名、邯鄲枕、又は廬生、青年廬生、大知識を訪ひて教を受けんとする途次、邯鄲の里に立ち寄り、粟飯一炊の間に玉枕に登りたらる十年の夢を見、此に出利は呈一夢の如きを悟りし事を作れり。歌舞伎脚記、謡曲百番通目録、一味清流、観世日記等にあり。二百十番謡目録に世阿弥の作と伝ふ。

謡曲方便概

名利に迷ひ、夢に玉枕に登り、覚めて現世を悟るといふ変化に富みたる曲なれば、其心して能く一曲の精神を理解すべし。徳としてすらすらと軽かるべし。次第は地心得にて無理なるべし。おつとりとして何度とも無き風情たるべし。

シテ

夢に入るまではシテの位を保ちながらも、素直に謡ひ、少し、名告詞、共に通して謡ひ、進行は猶静に出、通しようすぐくと調子宜かるべし。「さてはこれなるが」云々の間は少し唯りと出、「天の與れし心なれば猶軽のなれど」「思ひ寄らずや」云々、「こはそもいかに」云々より、それ〳〵玉枕に即かんとする身と心との変化を鳴して次第に唯りと位を改む。「来らし習はね」云々に心持あり、「天にもあがる」はかく謡ふ。「いつまでぞ」云々以後の地との掛合は敬楽極まる趣向巻、掛合、いづれも位を有ちて大きやかに品良く謡ふ。「いつまでぞ」云々以後の地との掛合は敬楽極まる趣にて調子好く唯りと来り渡し、地の地みあるべからず。「南無三宝」は全く拵り得たる心なれば、さまでには祈へす、やゝかゝつて付つきりと、明素秀の移りを無理なるべし。「南無三宝」は金く無を受へ、解を祈へ調子を少し下にとりて、しつとりと謡やかに詩めて謡ひ出す。以下掛合同し心得にて斬かつ祈へを後むる味はひなるべし。「南無三宝」云々以後の地との掛合は敬楽極まる趣す、やゝかゝつて付つきりと、明素秀の移りを無理なるべし。

ワキ、ワキツレ

花やかに調子を揚げて謡ふ。

子方

玉に斟すち臣下の心にて唯り謡ふ。

地

初の上歌は調子やゆつたりと声健やかに延み、なく受け、次の「ありがたの」の上歌は少し詩めて出、迫しより斬かに運ぶを有つ。「嶽の山と」云々以下陸くし謡大きかるべし。「国土安全長久の」の上歌は栗華を謡ふかれば次第に位を進め、延後無く唯りとあらべく、栗の前は充分に謡ひ嶽む。「謡ふ夜もすがら」以下は栗華を謡つて受に位を進め、「春折しは」云々の一章栗華に詩めたる極長なれば、音調極めて健やかに、しかもすがの後みも無く充分に栗をかけて高潮に達したる風情なるべし。「かくて時過ぎ」は前を承けて遂に志に進みを以て唯りと進み、句毎に謡ひ詰めて、止めを詩のずに謡ひ納む。夢覚めて後の掛合は前とは全く別になり、邯鄲の茅舎に茫然自失したる廬生の心を表すに努むべく、調子

を充分に抑へて敢しくしつとりとシテの謡を承け、次第に来を煽めて、「百年の歓楽も」より火しばかり引抑むちぶなるもべく、うよく〳〵思へば」以下抑へを捨て、素直に浸みく〳〵と謡ふ。

解釋

憂き世の旅に 云 夢にうきまくらふが如き取りとめも無き旅路は何事か果なきうんと。**蜀** 今の支那の四川省。**廬生** 青年の名。沈既濟の枕中記に、唐の開元七年、通士名籍といふ神仙の術を得たる者、邯鄲の道中なる邸舎にて廬生に逢ひ、廬生の志成らざるを歎くを聞き、嚢中の枕を貸すべし與へ、邸の主人の粟を蒸して未だ熟せざる短時間に八十年の栄華の夢を見せ、人世を覚知せしめること出づ。これを太平記にも火し変へて引きたり、されども太平記には主任に就きく〳〵ありて廬生の名無く、枕中記には廬生の名ありて即住の事なければ、は枕中記より太平記の記事を生むに至りし中間の他の諸書に貧困を歎し、富貴を願ひしやうに記せり。**茫然** ぼんやりと。**楚** 今の支那の湖北湖南の両省。**羊飛山** 地名の山無し。類似の名は湖北省襄陽府に羊子山あれども、これは惟ふに、太平記の地項の本文に掲げる山といふ詩人の之を詠じたる詩を掲げたるを山の名に誤用したらんか。**知識** 識者、智者。**一大事** 法華経方便品に「唯以一大事因緣故出現於世」とあり。**山又山を** 云 風雅集に「分け来つる山又山は蘿にて峯よりの峯の奥を迷けき」とあるを変へて用ひたる語。**そこともしらず** 知らず。**野くれ山くれ里くれ** 夫木抄に「道のべの露今分け衣ほさ辛して野くれ山くれ無夜のうらむしとあるにて後けたり。の(偏)は衣の縁語。野、山、里に夕べを迎へての意。**邯鄲** 今の直隠省広平府の西南に方り、停車場あり地。昔は趙国の都。地理の今は詳らかに知り難し。**其枕** 枕中記には、其枕青瓷にして両端に穴有りなり、即ち身を寄せて入るとあるが夢の故なり。**見うずる** 見んとする。**身を知る** 身の行末を知ると、人世を悟ることを兼ね。**門出** 出度の際、旅立。**村雨の雨宿り** 「一斛の露に宿り一河の流を汲むも他生の縁なり」といふ古語を引き、地名に来合せ枕を借りえたるを前世の縁なりとして思ふ心を籠めて悦ち。実際雨の降りし意に非ず。**中宿** 途中の宿り。**假寝** かりそめに寝る事。**楚國の帝の** 云 之より夢となり、枕中記には統官を歴て遂に無国の公に封ぜらるとあるを、太平記には楚王の隠れ給ひし剣、王の姫の夫となり、終に位に即くと記せり。**そなはる** 即く。**是非をば** 云 其事のよしあしは論ずべきに非ずとなり。**世を持ち** 王者となりて世を統べ有つこと。**瑞相** めでたきこと。**夕露の はぬ** 玉の無かりしに来り到れざるを、仏法をなに解せざるを恐に基あるいふ。**かくるべきとは** 云 「かくるは露と玉との縁語。淺茅生集に「あはれなり草の陰にも白露のかくるべしとは思」。**天にしあがる** 思ひ掛けざる厚に誘はれゆく旁。光栄に天に上れる故事あるに寄せそこふにや。**紫華の花も** 云 法の道理を受けて盛者必衰の理を説く。紫華は富貴なること。唯南子に「有二紫華者、必有二根性一」。**雲龍閣** 地名天皇にしいでたれど曲藤無し。或は秦二世の凌雲閣を思ひ誤りて作れるか。**白雲の上人** 知らぬを白に掛け、白雲といふに後けて雲の上人といふ。雲の上人は王宮殿の人。寺に成陽宮の中にありとしたらに擬れりと見ゆ。以下地名書の引文多し。**金銀の砂** 陳平蔵象記成陽宮の條に「起宮殿、殿中皆以金銀砂為地」云々。**玉の戸** 玉は美称。玉敷なる戸。**光をあらざる** 難かしく解れること。**寂光の都** 諸仏如来の居所なる常寂光土。蓋し境、帝釈天王の居城。太平記の御野の條に地獄出づ。**千顆萬顆の** 云 以下太平記に拾遺集に「数多顆の宝玉にいふ詞。和漢朗詠集に「島絶千顆萬顆之玉」。**千戸萬戸の** 云 千戸は千戸侯、萬戸は萬戸侯。天に聳る宮の如く、西宮御相雲客や、千戸萬戸の禄を兼かしれら地侯が禄を兼かして来朝せらるいふ。西王母の禄に「北辰に拱する数この、満録珠玉光を交へ、光明絲美として日夜の勝劣見えざりけり」。前後の文、或ばられしう特しく来うたるかしも思は「富の銀の山を」云 平家物語成陽宮の條に「長生殿ら。**禮の聲** 地獄朝貢して禮を盡す聲。古くは「富の聲」とし、たれども富にては意通せず。**銀の山を** 云 平家物語の長生殿の裏には 云 平家物語の長生殿不老門の造り、鐘を以て月を迎れり」とあるに倣ひて「三十餘文」といふかもべし。**長生殿の裏には** 云 あり不老門あり、金を以て日を殿、不老門の風流に門房殿の島さを三十餘文と記せるに準じて「三十餘文」といふかもべし。和漢朗詠集に「長生殿裏春秋富、不老門外日月遲」。富を留に振りて詩にもうて出す。「とみのたり」と謡へども、これは原作に戻りて「とみたり」と謡ひ改むべきなり。**五十年** 太平記の邯鄲の夢の條に「天住五十年」。**濃漿** コミヅの善漿。おもゆ。天のうんづはのでたき飲物。詩句に天漿と作れるものなり。**沉瀣の盃** 沉瀣を盃に見立てたる詩。漢書に見の。沉瀣は露水、海水、夜

栗ともいふ。白樂天の詩に「仙方捨二流俗一、食二菊飲一以長生」。**菊の酒**　千代ごと聞くの吉を受く。若九月重陽の節を保つといふ。祝ひ一酒。之を飲の人長寿を保つといふ。**團土安全長久**　用ひ慣はしたる詞と見え、浮世草紙酒顛童子にも「それこそ團土安全長久に」などとあり。**まさり草**　菊の異名。増ち意に掛く。**菊水**　慈童といふ仙人經文を書きたる菊の葉の雫をすくりて七百歳の寿を延べし故事。「葉の水」といふも共菊水なり。**流にゐかれて**　云々　お漢朗詠集の曲水を詠じたる詩句「奉流遥遥」を先遣」。**菊衣**　菊の色目の称なれど、こゝには菊の香の移りたる衣といふ程の意にて、次句を起さんための序とす。**指すも引くも**　舞の手の名。指すも引くも。次の光と盃とにかく。**盃の影**　盃の調を求めより「月の影」の詩に縛せしむ。**我が宿の**　云々　拾遺集の歌、菊の露が袖うくして寄なき歌楽に云ひかく。**榮耀**　はでやかなること。昔植の雑詩に「俯仰歳將暮、榮耀難久恃」。**常盤**　常に変らぬこと。**月人男**　月を擬人して云へる詞。こゝには虚生の栗華の樣を爲へいへらなり。萬葉集に「夕づの海ふ天路をいつまでか仰ぎて待なん月人男」。**夜かと思へば**　云々　夏かと思へば　云々　往生要集の浄土を讃したる條に「朝往暮来、現世苦痩春光融融、舞殿冷袖、風雨凄凄、一日之内、一宵之間、而来候不舞」などあるに想を得たりと見ゆ。**ありつる**　光剣在りしまうくのといふ程の意。**いそぢ**　五十四。**女御、更衣**　共に後宮の女官の官名。虚生の夢中にかしづきし多数の女官をさす。**栗飯の云々**　栗の飯を炊く程の短き間。太平記に「僅に半炊一黄粱の間を過ぎざりけり」。**百年の歓楽も**　同書に「人間百年の楽も、皆枕頭片時の夢なる事を悟り得て」云々。**命終れば**　枕中記、太平記共に命の尽るとともに目覚めたる事としたるにより、此上に望なしとの意。**これまでなり**　**これまでなれば**　云々　王位に昇れば栗華の極を盡したりとなり。**南無三宝**　仏法僧の三宝に帰依する事、事の矢鳴せる時、仏法僧の三宝に救ひを求の発する詞。**出離**　出離生死の略、生死輪廻の苦を離れ出でゝ涅槃に證入する事。**邯鄲の夢の世**　世に此邯鄲の故事を「邯鄲の夢」と称するを用ひ夢の世と後く。

四番目
累脇能

シテ次第上
ツヨク　**憂きせの旅**　憂きせの旅
ヒキ　**よ栗**　よ栗
ヒきて。**夢路をいつと定めん**
サシ上　**これ蜀の國のかたらよ。虚生といへる者なり。われ人間よりありながら、仏道をも願やぶ。たゞ花然と明し暮すばかりなり。**
眞や栗國の羊飛山よ。尊きさ知識の

邯鄲

無季

シテ　虚生　夢中ノ栗人
ワキ　夢中ノ牧使　生
ヲモレ　夢中ノ大臣　狂言　邯鄲ノ宿ノ主

まゝまで由で頃りて及びては程よ。身の一
大事をも忘れぬ。やと思ひ。唯今羊飛
山へて急ぎは行かやうに駒に。國を雲路
のあとよ見て。國を雲路のあとよ見て。
山又山を越え行けばそこともなき
旅寝。野暮れ山暮れ里くれて。名よの
み聞き。郡鄣の里よも早く著きよ

けり里よも早くつきよけり　急ぎは
程よ。これはや郡鄣の里よ著きては。
未だ日は高くはへども。此處よ旅宿せう
ぞるとて。いろよ案内申は。これは
旅人とて。一夜の宿を所賃しはへ
これは蜀の國のかたよらよ。盧生とてゐる
ものなり。われ人間よありながら佛道

ちも願ひぞ。たゞ茫然と明し暮せども
ろよ。楚國の羊飛山よ。尊き知識の
まゝまゝ由て彼りう及びて行程よ。身の一
大事をも尋ねぎやと思ひ立ちてしたゞ
さて其枕いどづくよ虚座ぞ。さらぬ
方越え一睡見らぎるそしたゝ
これなるゞ向きの及び邯鄲の枕なる

やこれい身を知る門出の。世の試よ
夢の告。天の與へる事なるべ
一村雨の雨宿り　一村雨の雨宿り。
見はまだ残る中宿よ。假寝の夢を見
やと邯鄲の枕よりけり邯鄲の
まくらよけり

上歌

事なるべ

日本付

いろよ虚生よ申まべき事のい　そも

いらるる者ぞ　日本　楚國の帝の御位を。
虚生よ讓り申さんとの勅使これまで来りたり　シテ　思ひよらぬやまを位よ。
そも何故よそおるべき　日本　是非をば
いうでばおるべき。御身代を持ち給よ
べき。其瑞相ここにあらはやく
輿よめさるべし　シテ　こはそも何どう露の。

光おくやくもの輿。乗りも習はぬ身の
行くへ　日本カケリ　知るべきとは思はぬぞ　シテ　天よもあがる　日本　心ちして　地上歌　玉の御輿
よ法の道。玉の御輿よ法の道。榮華の
元尽にしたがひて　人天　花も一時の。夢とは白雲の上人とぞ
不思議なる　真ノ未序　上誠頭打切　ありがたの氣色
やなり。ありがたの氣色やな。本より高き

雲の上日も光はあきらけき。雲龍閣や
阿房殿光も滿ちて滿ちてげよも妙なる
有樣の。庭よハ金銀の砂を敷き。四方の
門扉の玉の戸を。出で入る人までも。
光をかぞるよそほひ。眞や名よ同きし
叙光の都喜貝城の。樂みもかくやと
思ふ。ばかりの氣色かな。千顆萬顆の

玉の數を連ねて捧げ物。千戸萬戸
の旗のあり。天よ色めき地よひゞく禮
の聲も。おびたゞし。禮の聲もおび
たゞし。東よ三十餘丈よ。銀の山を
築出せて。かゝ。ねの日輪を出されたり
西よ三十餘丈よ。黃金の山を築か
せて。銀の月輪を出されたり。たゞへで

これは。長生殿の裏には。春秋を富め
たり不老門の前には。日月遅くして
き。いつまでもいたりしらず秦国申を
心をまるべきたり
べき事のいまだ位は即き給ひてはや
五十年なり。然らば此仙薬をきこし
めさば。千年千歳までも保ち給へべし。
まる程は天の濃将水や流灌の盃。これ

まで持ちてまゐりたり　そも天の濃
将水とは　これ仙家の酒の名なり
流灌の盃と申もことは　同じく仙家
の盃なり　寿命は千代ぞと菊の酒
榮華の春もよろづ年　君も豊よ
民榮え　国土安全長久の。国土安全
長久の。榮華もいやまさる猶喜びは

まさり草の菊の盃とりぐよいぎや
飲まりよ　廻れや盃の　めぐれや
盃の流れ菊水の流よひかれてそく過
ぐしれば手まづさへぎる菊衣の花の袖を
飛翻して指もしらくも光れや盃の
影のめぐる宮ぞ久しき我ぐ宿の
我ぐ宿の菊の白露けふ毎よ幾代積

りて淵とるらん。よも盡きじよも盡
きじ藥の水も皇ぬれど。汲めども汲め
ども尽きまじる菊水を。飲めば
甘露もかくやらんと。心も晴れやすよ。
飛びこつぞ有明の夜畫とおもき樂
みの。榮華よも榮耀よもげよ此上や。
あるべき。樂不合　いつまでぞ。榮華の春も。

常磐にて　地上 猶幾久し有明の月

シテ中 月人男の舞なれば。雲のはそでを重ねつゝ。喜びの歌を。謡ふ夜もすがら

地 謡ふ夜もすがら日は又出でゝあきらけくなりて。夜かと思へば　シテ 晝になり

地上 晝かと思へば　シテ中 月またさやけし

地上 春の花咲けば　シテ下 紅葉も色濃く

地上 夏かと思へば　シテ 雪もふりて　地上 四季をりをり目の前にて春夏秋冬萬木千草も一日に花咲けり。面白や不思議やな

上歌 かくて時過ぎ頃去れば。かくて時過ぎ頃去れば。五十年の榮華も盡きて眞は夢の中なれば。皆消え消えと失せ果てゝ。ありつる邯鄲

の枕の上。眠の夢。さめよけり（行記）

（シテ上）盧生い夢さめて

（地）盧生い夢さめて。

いそぢの春秋の。榮華も忽ち。茫然と。

（シテ）起きあがりて

（地）きもとあり多あり

（地拍子板）音とあり

（地）女御更衣の聲と。

（シテ）松風の

（地拍子板）假の宿

（地）音とあり。宮殿樓閣。たゞ邯鄲

（シテ）の假の宿。榮華の程。五十年

夢の間ハ

（地）して夢の間ハ粟飯の

（シテ）炊の間に

（地拍子板）間あり

（地）あり。不思議あり。やはり難

（シテ）つらく人間の。有様と。楽むるよ

（地）百年の歡楽も。命終れば夢ぞかし。

（地拍子）歡楽も

五十年の榮華とて。身のためよかれ

まであり。榮華の波も齢の長さも。

五十年の。歡楽も。位よかれぞ。これ

地　柏子
げまあるかたや。邯鄲の

まで。ありげよ。何事も一睡の夢
南無三宝南無三宝よく〳〵思
へば出離を求むる。知識ハこの枕あり。
げにありがたや。邯鄲のげにありがたや
や邯鄲の。夢のせそて悟り得て。浦
かなへて帰りけり

殺生石

解題　玄翁和尚那須野の原に殺生石の石魂を成仏せしめしことを作る。二百十番謡曰録に安清作。共曲より特にして作られたる古曲に野干、及び現在殺生石あり。

謡ひ方梗概　鬼物なれば強く雇うとして重から不。初より**クリ**前まで。**シテ**前シテは女かれ。野干の化身。

注意すべき謡ひ方　八枝表の五行目、「玉藻前」の「に」の節は、善尾を水に折へて扱ひ、次の詞に続く。

辞解　**心を誘ふ**　玉藻千禅師の「身は雲水の如く悠々として去来す」といへると心にて行脚に出づる旨を誘ふ。うきは雲と水との縁語。**玄翁**　本朝高僧伝に「秋玄翁」字

でを序に、以下を破に、後半を急の位に謡ひ分くべし。初より**クリ**前まで。**シテ**前シテは女かれ。野干の化身。

なれば常の如く優しからず。強に強みをもち来し下にとりて精神に呼掛け、共心持にて**ワキ**との問答に入り、「命かな」と句切を忙しからず。**サシ**以下謡すらりと扱ひ、**クセ**の**上端**は大らかに雇うとあちらべし。「今は何をか包むべき」よども来はかけず。強みを本に雇うと聊か強みをもちてすら〳〵と扱へ、行宣し。

り聊か心持を更へ、前よりも位を進めて強めに言ひ、地獄し前「夕陽の」を雇うと止む。後は業（わざ）を主としたるものなれば謡ひは拍子の事無く、強みを本に雇うと聊か強みをもちてすら〳〵と扱へ、行宣し。

光づ出の「石に精あり」を先くなるべきやう強くと出で、次句より拍子に合せ、雇うと、そもかねやうに謡ふ。「今は何をかつゝむべき」云々は節を大きく、節無き霊を帰らねやう、次句をかつしりと、かゝって謡ひ地に渡す。「其後数

使主つて」「西介は特装束にて」は地と一つにならねやう、位大きく、精引き緩りのて謡ふ。

の調はテキハキとあちらべし、「汝元来」云々より心持を更へ、「急々に去れ〳〵」とかゝって強み

なり〳〵扱ひ、「攫取せよ」は大きく雇うと止む。後シテ出で、後は隠してさらりと謡ふべし。

てたち景色を精すらりと物哀しきやうに謡ひ、餘り重からねやうにす。**クリ**は心持を一変して前よりも位を

進め、**サシ**以下さらりと、**クセ**は強ひ出しを雇うと、通じて強の強み無きやう

好き程の速にて謡ふ。「立ち返り」云々の**上歌**は強く〳〵つしりと扱ひ、止メの通しにて聊か緩む。後は「像

を今そ」云々を重つて強に出で、「石魂忽現れ出でたり」と精引きを立て、速ひ、「恐しや」と大きく止む。

「やがて立体を」云々は初の一句を雇う附け、通しより頭次位を早め、修羅来りの調子にて稍好く扱ひ、「其後

数度主つて」以下**キリ**へかけて特に強意を附けず、穏にして剛健にすべし。強み無く謡ひ強く〳〵と強ひ。

は玄翁、或は摩、慈徳の人なり。（中略）長谷山和尚に恵持に冬して遂行精久し。後に疑團を破て印契を承け、後方に遊化す。（中略）初御所に到る。（中略）文和二年野州那須野に居て集注禅院を立峰山に住して安居すること七年。（中略）一軸を懸て衆之を拝に挑りて長寿を祝す。時の人、殺生石と名づ。（中略）野州那須野に妖石あり。一たび其毒に觸るゝ人畜皆斃る。時の人、殺生石と名づ。鉄一日行きて石に当り砕れたり。毒行れたり。殺生石の事、使者に見えず或は玻璃（寺藤）の類なりと謂ふ。頗ふに好事の者、破竜護に擬して生を馬すなり。（中略）世説に随て殺生石に施さての事は高僧傳の所説の如く破竜護の故事と云前の徳に附会したれども後世の偽なりと。然れども其附会が此話曲に初まりたるか、又は話曲以前に他書に見えたるものか詳かならず。破竜護の事蹟といふは、昔支那に一僧あり、或時、去山廟に詣で竜に逆ひて杖を以て之を下し、「汝是天竜護、聖徒何を来」と呼へて更に之を下すに竜は如心堕落し、やがて竜雲青衣の人と化して現れ、僧に得脱の喜を述べたりとなり。

道人 名利を捨て、俗を遁れて志一人なり。**知識の床** 拝座。**一大事を** 一見性。**一見所** 一見識。**拂子** 禅家にて導師の標なり法具に用ふ。さらに拂子を打ち振つて云すなり。**世上に眼をさらす** 逆磨化益。**冬夏** 恢在世の例に倣ひ、長春夏日安居して修業するを夏安居といふ。**心の奥を** 奥州を平に奥とも云ふにより、遠ふ心の奥深き意に通はせて心の奥と云ひ、奥を知るにかけて白川を出し、水をむすぶ（掬）ぶと掬の結ぶとに通はせて云ひ、掬の字を結ぶと作りて下野に寝く。**那須野** 下野国那須郡の廣大なる平野。**殺生石** 今那須山の麓に殺生石と称する石の遠時と称するものあれども、四とう後人の殺托なりし、破竜護其他の夏蹟と時を異出せし為、殺生石と称して天下を定む。上徳命赤原家の古なり。凡今の射狗のことは此に本づくと云ふ。又曰く、此殺は乃ち周の褒姒の化する所なりと（詩文）とあり。此記録は当時行はれし大道物を基はすして記したるなるか、之によりて思ふに、此話曲も、王朝初期の大道物奉行の影響を受けたらんか。之によりて思ふに、此話曲も、王朝初期の大道物に外ならざるべし。**執心** 恋慕に執着する心。**あまさかる** 鄙に属する枕詞。天雲遠く隔たりたる意にて出す。新渡野の美景なる叙景。白楽天の白宅の詩句に「長安遠く親れたる意にて出す。

奥松桂の 云、秋風の吹くといふ事を偽りて出す。新渡野の美景なる叙景。白楽天の白宅の詩句に「長安遠く親れたる意にて出す。

の上人 知らず、白雲、雲の上人と云ひかく。雲の上人は禁中に仕ふる人。**紅色** 北枕。**経論** 仏教の経文と論説と。**聖教** 先哲の遺教。**出世** 身分高き人。**白雲** 高僧。**清涼殿** 内裏の宮殿の一の称。**月卿雲客** 公卿、殿上人。**堪能** 上手。**松明** たいまつ。**大内** 宮城。**書画** 書を描きたる詩屏風。平家物語に「かの清涼殿のくちとの所に

の屏風 子には、若金剛が書きたる詩屏風。平家物語に「遠山の有明の月もあらぬとかや」。**蔵の戸** 清涼殿の北、弘徽殿の北に蔵を書けりにより此名あり。**御膳** 外戚。**安部泰成** 式家。

の錦 書きたるもの隠れてあらぬ此為。大系国に奉親の子として泰成、従四上とある外、似たる人名も無し、安部泰親は法眼の陰陽博士にて平家物語等にも見えたる人なれば、類似の名を假作したるものか。**勘状** 勘へ調べたる

すも如清涼殿子、皮肝玉藻記に、近衛天皇久寿元年に、鳥羽院の仙洞に頻祥かゝる美歌の女性あり、玉藻前と名づけ寵愛せられしが、鳥羽院の御寵愛の姫君をかゝなたり、其勢を露し奈良野が原に逃げ行きしを射殺されたりとあり。又、神皇正統記に、近衛院の條に「同年（久寿二年）三月今上徳命寺に課て下野国那須野に妖石を射殺したりふ。玉藻前是也」とも見ゆ。されども此事の書は作年代不詳にして、此は話曲以前の書なりとの説もあれども必ずしも信を置くに足らず。但此傳説が能楽宗盛の時を経ること遠からざる事徳年間の日記録宣明件録の一節に見えたることは、当時其傳説が謡曲以外の方面に於て如何なる程度まで行はれしかを窺ふに足るものと云ふべし。

同書を上徳発端二月廿五日（慶永三十年）より二十六年後、まさに徳二年）の條に、「被光院主清山来り、話次、射狗（犬追物）を云ふ。昔、鳥羽院の御宇、思に美女あり、所出を知らず、名づけて玉藻前と云ふ。然るに帝の寵愛すること甚だしく、遂に之を椅る女官として禁中不審、之を卜ふに射ち殺すべしむ所なり、時に之を験らんとす。然れども捷疾にして猶へ得べからず。光づ武士に命じ、馬に跨し狗を射ゝらしめて以て禁を射ることを習ふ。然る後、上徳命赤原家の古なり。凡今の射狗のことは此に本づくと云ふ。又曰く、此殺は乃ち周の褒姒の化する所なりと（詩文）とあり。此記録は当時行はれし犬追物を基はすして記したるなるか、之によりて思ふに、此話曲も、王朝初期の大道物奉行の影響を受けたらんか。之によりて思ふに、此話曲も、王朝初期の大道物に外ならざるべし。

奥松桂の 云、秋風の吹くといふ事を偽りて出す。新渡野の美景なる叙景。白楽天の白宅の詩句に「長安遠く親れたる意にて出す。

の上人 知らず、白雲、雲の上人と云ひかく。雲の上人は禁中に仕ふる人。**紅色** 北枕。**経論** 仏教の経文と論説と。**聖教** 先哲の遺教。**出世** 身分高き人。**白雲** 高僧。**清涼殿** 内裏の宮殿の一の称。**月卿雲客** 公卿、殿上人。**堪能** 上手。**松明** たいまつ。**大内** 宮城。**書画** 書を描きたる詩屏風。平家物語に「かの清涼殿のくちとの所に

の屏風 子には、若金剛が書きたる詩屏風。平家物語に「遠山の有明の月もあらぬとかや」。**蔵の戸** 清涼殿の北、弘徽殿の北に蔵を書けりにより此名あり。**御膳** 外戚。**安部泰成** 式家。

の錦 書きたるもの隠れてあらぬ此為。大系国に奉親の子として泰成、従四上とある外、似たる人名も無し、安部泰親は法眼の陰陽博士にて平家物語等にも見えたる人なれば、類似の名を假作したるものか。**勘状** 勘へ調べたる

所を記して朝廷又は将軍家へ奉りし書・勅文。**王法** 帝道。**化生** 変化。**調伏** 怨敵邪崇を降伏除滅する祈禱。**衣鉢を** 云々 仏家に、法統を伝ふる為に、祖師の衣鉢を鉢（食器）とを授くる習はしあり。**畫は淺間の** 云々 あさま（明らさま）を浅間にかけ、畫、絵の詞を変ゆて、夕、夜の絵を出す。**憾悔** 過去の悪業を悔りて悔い改むること。**あかし** 夜を明かすことに燈火の明かりをいひかく。**栽が影** 夜の明かりは栽が影殺かうとなり。**草木國土の** 云々 一項四句の偈文「仏成道、観見法界、草木国土、悉皆成仏」を引く。此偈文仏家に善く通用すれども典據詳ならず。**佛躰具足** 具備に既に成仏すべき本性を具有せる意。**汝元来** 云々 以下古翁が石に対して云ひし詞。大方島帰侍に記す所と似通ひたり。**面目** 本来の義、現成公案大義事、黒顔中行他度量（他を経とし一なりもあり）とあれども典據明らかなら ず。**眞如** 真實にして変易なる意。**攝取** 収め取るの意。**石に精あり** 典據不明。心異さ石にも精霊ありとの意、以下、水にも魂あり、風にも魂ありとの意を陳ぶ。**高麗の** 諸に「草木土砂風雨水石まで悉く仏性あり」とあり。**斑足太子** 仁王経護国品に、昔天竺（印度）の天羅国に斑足といふる太子あり、外道羅陀師に教を受け、千人の王の頭をとつて塚の神を祭らんとし、既に九百九十九人までを捕へ殺し、残り一王を求めんとす。**野干** 狐。**仁體** 人の姿形。昔釋尊因品に、昔天竺（印度）の天羅国に斑足といふる太子あり、外道羅陀師に教を受け、千人の王の頭をとつて塚の神を祭らんとし、既に九百九十九人までを捕へ殺し、残り一王を求めんとす。**玉體** 天子の御體。**三浦介、上總介** 時政者同山侍には三浦介義澄は大を連れて射る時射の式。其延原を射殺野の野干逃げ去りぬ。**犬追物** 犬追物にまふ詞。犬の足の躰に従ふ意。**達引** 難き御法 たやすく達ひ難き仏教の意。平家物語に「人身は受け難く、仏教には遇ひ難し」。

四五番目
累二番

九月　シテ 石魂（前ハ里女、後ハ野干）
ワキ 原翁　狂言 能力

殺生石

ワキ次第
心を誘ふ雲水の心を誘ふ雲水の憂き
世の旅より出でうよ　これも源翁とぞ
道人なり。われ知識の床を立ち去らぬ。
天下事を歎き、一貫所を開き。経を拂子
をうち振りて世をよ眼をさらまで。此程は
奥州よりぼりぼりぼり。都より夏なれども結

ぎでやと思ひ（道行上）雲水の身いづくとも
定まるき。身いづくとも定まらきせ
の旅よ来ひゆく。心の奥を白河の結び
あたらず野や。那須野の原よ著き
よけり 那須野の原よつきよけり

（シテ引）のう其石の邊へなとも寄らせ給ひそ
（呼掛）そも此石のほとりへ寄るまじきぞ
（ワキ）

（シテ）それは那須野の殺生石とて。
人間は申もよ及ばぬ。鳥類畜類までも
さやうよ命ぢ。かく恐ろしき殺生石
も。知らしめされでお僧たちは。もとめ
給へる命なるぞ。（ワキ）とて
此石は何故かく殺生をばいたしやらん
（シテ）昔鳥羽の院の上童よ。玉藻の前と申

〻人の執心の石となりたるなり

ロキカ九上 不思議なりとよ玉藻の前の殿上の

交りたる身の此遠國より魂をそそ

めし事は何故そ　シテ　それもいとしの

おれとて昔より申しなられまらめ

ロキ　中身の風情言葉の末いとれを知らぬ

事あらじ　シテ　いや妻くはいさ白露の

玉藻の前　ロキカ九上　何さ〻昔は都ぞまひ

シテ　今魂はあまざかる　ロキ　鄙より殘りて悪

ヨウク　念の　シテ　猶もあらじ　ロキ　此野邊の

ヨウク　往来の人よ　シテ　あだを今　地上歌　那須野

の原よ立つ石の　那須野の原よ立つ

石の苔よ打ちて　跡までも執心を殘

しまて　又立ち帰る草の原　枯草き

秋風の梟松桂の枝よ鳴きつゝ孤蘭菊の花よ隠れむ。此原の時も物凄き秋の夕べかな。抑この玉藻の前と申さば出生世定まらぎして。いづくの誰とも白雲の上人たり身なり

●サシフセ詞外

地 シテサシ上 しよ

地 シテ上 ・然れば紅色を事とし容顔美麗なりしかば。帝の叡慮浅からぬ。

地 シテ上 ある時玉藻の前が智慧をはかり給よ。一事一言とゝまる事なし

地 経論和歌和漢の才。詩歌管絃に至まで。問ふ答の暗からぬ心底くもりなければとて

地 玉藻の前とぞ。

召されける

地 ある時帝ハ青涼殿より

地 出給ふ。月卿雲客の堪能なるを召

能ニテ白頭ノ時ハ消えよけり。

光

しあつめ。管絃の声遊あり。頃は
秋の末。月まだ遅き宵の空の雲の氣
色凄く。うちくれ吹く風よ。殿の
雲も消えよけり。雲の上ぐ。ちち騒ぎ。
松明そくて進むれば。玉藻の前ぐ身
より。光を放ちて。青涼殿を照しければ。
光大内よ満ち満ちて畫圖の屏風

萩の戸。閨の夜の錦なりしかど。光よ
ぬ。やきて。ひとへよ月の如くなり
帝それよりも。苦惱ぐらせ給ひしかば
安倍の泰成占つて。勘状よ申さく。
これひとへよ玉藻の前ぐ所為なり。
五法を傾けんと。化生して来りたり
調伏の祭あるべしと。奏もれば忽よ。獄

慮もなくひきよせて。玉藻が生を
本の身よ。那須野の草の露と消て
跡かたもなかりし。
給へ。此身はいかなる人やらん。今は何
をか包むべき。其古へは玉藻の前。今は
那須野の殺生石。其石魂とそなりぬ
げにや餘りの悪念は。よくよくて善心と

能ニテ白頭ノ時ハ
夜ヨリ出テ。

なるべし。然らば後世を祈れと授くべし。同じく
本體を。二度あらはす給へ
あら悔しや我が姿。畫は淺間の子
三ツ地上歌
煙の立ちのぼり夜よりて。立ち
のぼり夜よりて。懺悔の姿現さんと。
夜叉元知の闇の夜の空なれど。此夜はあり
燈火の。我が影なりと思へ。恐れ

絵で待ち給へと石に隠れ失せよけりや石に隠れ失せよけり

本石心あり

是皆成佛して間く時は。本より佛體具足せり。況んや各鉢を授くるをや。成佛疑あるべからず。花を手向け焼香し。石面に向て佛事をなす。法元来殺

問ふ石霊

生石問ふ石霊。いづれの處より来り。今生かくの如くなる。急ぐよ去れ去れ。自今以後法を成佛せしめ。佛體眞如の善心を生ずん。攝取せよ 後シテ花又出端ノ言葉 石よ

水ノ音ありノ謡出ル 小鼓ノ間ヨリ出ル 師傳ヲ受クベシ

地拍子

音あり。風

地

精あり。水の音あり。風は大虚よりわたる

象を今ぞ現ずる。石のとつよ割れて石魂忽現れ出でたり。怒ろーや

平カ八上

不思議や為此石こつよ割れ。光の内を
よく見れば。野干の形はありあらら。
さも不思議なるくわい體なり　シテ上　今は何
をか包むべき。天仁こつよては羽衣子の
塚の神。大唐にては楽天の居宅と似て
現じ。我が朝にては鳥羽の院の。玉藻
の前とは。ありたるなり　ワキ　われ法を

●仕舞

傾けんと。假に優女の形となり。玉體よ
近づき奉れば惱となる。院より命
を取らんと。悦をなし　所に安倍の
泰成。調伏の祭を始め。壇に五色の
幣帛を立て。玉藻に幣帛を持たせ
て　平カ八上　月輪を碎き祈りしかば　地上　やがて
五體を苦めて。やがて五體を苦めて

地拍子

其後

那須野の

帯帛をあつとり飛ぶ空の。雲居を翔り海山を越えて比野に隠れ住む

其後勅使立つて。

其後勅使立つて。

三浦の介。上總の介兩人に。綸旨を賜はれて。那須野の化生の者を。退治せよとの勅を受けて。野干は犬に似たれば犬をそ射たりけるこれ犬追物の始と

地拍子

を取りこめて

やや兩介は狩装束にて、兩介は狩装束にて數萬騎那須野を取りこめて草を分つて狩りけるに。身を何と那須野の原に顕れ出でを狩人の。追つまくつすくりよつけて。矢の下に。射ふせられて。即時に命を

徒よ。那須野の原の露を消えても猶
執心の此野よ殺生石となつて。
人をとること多年なれども今過ひ
難き。法を受けて。此後悪事をいた
さじ事。あらじとて所の僧よ。約束固き。
石となつて。約束固き石となつて。鬼神
の姿は失せにけり。

解題

禁式部が書きし古ふ説源氏物語中の六條御息所の事を作れる曲なり。御息所は基の大臣の女にて、前の春宮なりし桐壺帝の弟の宮の妃となりて十七の時東宮を設け給ひしも、二十にして宮に後れ、それより六條京極に住み給ひしが、世にいう六條の御息所と呼ばれ給ふ。こゝに光源氏の君いつくしみ思ひて通ひ給ひしが、それも漸う疎くなりぬ。御息所の下人と、源氏の宮葵上の下人と、車の立て所を巡り、葵上の車を供の車の牛に押し進ろ様を打ち折りなどして辱めし事あり。御息所かねての嫉妬の上に此怨を受け重ねて、恨の餘り其生霊葵上を悩ます。遂に河原の院にて夕顔の命を取りし如く、亦葵上をも空しくなすぬ。これが為源氏の君との中は全く絶えたるが、後斎宮に立ち給ひ、御母御息所と共に野宮に住つれ、歌なども詠み交はし、夜もすがら物語りがて伊勢に下らんとし給ひし九月七日、源氏の君野宮に尋ねて別れ給ふ。斎宮は十六日桂の御禊後ありて御母と共に伊勢に下り給へり。此曲は物語原文をもとゝして、詩句を取り入れ、此事蹟を一篇の通去物に作り做したるなり。世阿弥の作と傳ふれども詳かならず。洋風習通目録に曲名見え、観元日記に寛正六年二月観世が演じたる記録あり。古く曲名を野々宮と書く。

謡ひ方稽古

静にして品位ある深味ある物の中にては情変化に富みたるものなり。ほゞ井筒に似て、無く深へち風情かるべし。

シテ

前後を通じて位静にしつとりと扱ひ、幽玄の姿を表すべきものとす。次第は吉を祈へて調子しく出づべきも、変物なれば緩く低くからぬが宜し。サシは身の憂きを嘆つぶやきて薄やかに扱ひ、アタリ寄りも厳ちすくふさく然も通じてさらりとしたち味はひを有ち、下歌にて少し後め、上歌は緩う高くなるぬやうとつとうと、懐ひの程をしみ〳〵と述ぶべし。ワキとの問答は位を保ちて優に承け應へ、「昔に変らぬ色ぞとは」とう僅に位すむる心にて掛合に入り、次のサシはしつとりとしたる趣ありて逆ぶあるべく、以下此心持にて後ケセの上端は稍雅りと扱ひ、ロンギは稍さらりとして大し静に品好く渡す。後は昔に返り去数に悩む心にて、家高く艶麗に取らず、聊か長用に花やぎたる味はひあるべし。「いかなる車と」云ふの詞は稍雅りと出で、舟、ルより雅りと発み無きやう地へ渡す。「昔を思ふ花の袖」は序の舞の掛合に移り、終の「ばつと寄うて」を特に来ひみて、の宮の云々とはワカなれば優に心ある様に謡ひ以下地との舞合は弾かしつとりと趣を附け、特に来

つて品好く氷ケ敷す。**ワキ** 重き三番目物なれは静に品好きを旨とす。「あれ此森に」云こは少し向を置き
謡は猶哀し **地** 初の上歌は作へて静に謡ひ、シテとの問合は物静に、掛合に入りてさらりとなり、特
く扱ふ。 てやさらりめに謡ひ、言を能のてしめやかに、萬條たち風趣を謡ひ表す。ク
リは少し〳〵引き立て、確りと、サシ以下さらりめに、クセは寛りと風情ありてしか
もたゝたるく無きやう、ロンギは更へてクセよりもすく〳〵と扱ひ、「夕巷の秋の風」はシテを承けて
品好く、物静に中入前の心持を謡ひ表すこと肝要なり。後は「人々様に」云こを家令を非さず引き取
り、其まゝかゝりて後ケ、「もなき」と猶家を抜き、「身の程を」より練めて心持あるべく、「よ〳〵や思へば」
以下を締めて謡ふ。「月にとかへす」云こは優しく暢びやかに附け、シテとの掛合は静り高くなりぬ
やう、猶しつとりと来り、「露うち拂ひ」は更へすに変けて出、「松出の音は」をすら〳〵と良ちく如くに
扱ひて「りん〳〵」と猶確り、「夜すがら」と謡ひ止めて一息向を置き、「かろが〳〵や」と内へとりて大きく破
の舞前なれは少し家を乗せて扱ふ。此地通にて風情ゆか〳〵く、さながら修羅を展べたるが如かるべ
し。心〳〵して謡はざるべからず。幸りはさして低めず。調子好〳〵すらりと謡ひ納むべし。

注意すべき謡ひ方

終の掛合の中、地謡の「庭のなくすまれ」の「び」の下げは通常本落しに落すべき所附
なれとも、次のシテの謡の始に中音の入の所ちなめ、特に中落しに落すものなり。

辭解

洛陽 帝都の意。京都をさす。 **嵯峨野** 山城国葛野郡、今の嵯峨村の地。洛西の名勝。 **森林** 桂葱草の野宮を記しなる故に「物すごなる古へ天皇の即位ある毎に、未婚の内親王又は女王を選びて、伊勢神宮と賀茂神社とに奉祀せしめられたるを、伊勢にては齋宮、賀茂にては齋院と云ひ、奉祀に先だち潔齋の局に座す宮を城外の清野に造りて、之を野の宮と稱せり。蓋にいふは齋宮の野の宮にて、山州名所志に、葛野郡常寂寺の異三町ばかり平林の内に名跡ありと見えたるものなり。 **逆縁** 初より其心ありしにあらずして事の序 **黒木の鳥居小柴垣** 黒木は皮の附きたるまゝの木。小柴垣は原氏物語賢木の巻より借りたるなり。 **かゝる** 延喜式に「以黒木反革、構鳥居、以柴垣為御」。作者は原氏物語賢木の巻を指す。此 **時節** 齋王が野宮に退り又伊勢に下る時共に秋なるをいふ。 **伊勢の神垣** 云 伊勢の神宮に神佛の陽無しといふ意にて際る。尋ねて見ちを宮所に掛けたり。 **花になれこし** 云 春秋の花に親しみ来りたちの野の宮の秋吉うて後は其家しさいかばかりなるんとなり。六條御息所が源氏の君に別れて秋の末つ方野の宮を

去り除ひし表れさを含めなり。 **物の寂しき秋** 古今集に「山里は物の寂しきを含めなり。 **猫しをりゆく** 云 露は秋ふるものなれど、涙の露は秋悲れても尚袖の萎るゝまでにふりおくとなり。 **身を辟く** 苦憂する意。露の縁語。 **千種の花に** 云 源氏の君が種々の女に心をうつしたるをいふ。後撰集に「心の色」のうつりゆくかな、千載集に「かくばかり身にしむ色は秋もあらじ」。清夜の月の木枯の風。 **衰ふる** 恵の衰ふる意。 **木枯** 千載集 **消えかへり** 消え入る程に思ふ事。かへりは次の古へへの縁語。 **しのぶの草衣** 源氏物語巻の巻に、後撰集の歌詞「何にしのぶといとゞ露けれど」とあるを借る。忍を忍摺りの意。陸奥州の信夫に掛け、草衣を連顔とし、若と衣とをかけて次句を起す。 **假の世** 草の陰語刈りに掛く。永住し得ぬ世せにはゆきかへりかりの宿にもとまる心を」。 **齋宮** 齋宮のこと源氏物語の葵、賢木、さか雨老に詳し。此ては齋宮になり給ひしこと、陳御息所の嫁宮を指す。此長月は九月の異名。此日葵上の殯後久し振りにて源氏が御息所を野宮に訪れたる日なり。賢木の巻に見ゆ。 **長月七日** 祓禊、神祭なり。 **行くへも知らぬ** 何所の者とも知れぬ意。 **光源氏** 源氏物語の中心人物。桐壺帝の第二の御子。 **此事絶え** 齋宮の事の廢絶せしをいふ。 **忌垣** 社の垣。 **御息所** 仏訓みやすんどころ。もと主上の御休息所の稱なれど、特に東宮親王等の妃の尊稱に用ふ。茲にては六條御息所を指す。 **御神事** 賢木の巻に「榊をいさゝかをりて、賢木の巻に出でたる御息所の歌。野の宮の垣には、三輪に在る如きしるしとなるる杉は無きに、いかに折り来がへて榊をしるべに来り給ふぞとの意。 **神垣は** 云 賢木の巻の詞に「変らぬ色を」云こ。 **常盤石の蔭** 賢木は常緑樹なればいふ。夫木抄に「榊葉の色もかはらぬ色を山に常盤石の蔭と生ふるべきかな」。 **変らぬ色** 賢木の巻の原氏の君 **つ散り** 散る山の夕時雨」云こ。 **浅茅が原** 云 賢木の巻に「浅茅が原もかれ〳〵なる」。夫木抄に「うらがれて野べの草葉の」云ことあるを取りまぜて作る。茅がやは高く生ひず、度く生ふるよし浅茅といひ、うらがれとは草木の末の枯らくをいふ。 **ものはかなよしや** 云 賢木の巻に「ものはかなげなる

小萩を大垣にて、板屋どもあなりく〜いとかりそめなるあり」。**火焚屋** 衛士の庭火忌火を修理する所、同じ巻に「火焼屋かすかに光りて」云々。**思うちにある** 云々 同じ巻に「こゝに物思しき人の月日を陽て給へらむ」とあるにそ作りかゝしなり。**桐壺の帝** 桐壺の巻に見えたる本朝文粋に「情動於中、言形於外」とあ

る 云々 本朝文粋に「情動於中、言形於外」とあるに假作

前坊 桐壺帝の弟の宮、前の春宮。**時めく花の** 云々 前坊の時を得て盛かなりしを云いかけて、詞の天皇。坊と御息所との中の隔きに比ぶ。**妹背** 夫婦。**會者定離の習** 會へは別るゝ事ありといふ諺。平家物語に「會者定離は浮世の習にてかなり」。**おく**

れ 死に後れ。**さてしもあらむ** 暴称のまゝにても居らざりしを云ふ。**身の露の** 露の身といふべきを、露の光と後けん爲に語をおきかふ。

わりなくも 離れられずとも。**忍び忍びに** 源氏の居の御息所に通ひ給ひしをさす。**また絶え絶え** 葵上没後再び源氏との中の絶えしをさす。**つらきものには** 云々 厭はしきものとは流石に思ひ切らずとの意。賢木の巻に「つらきものに思ひはて給ひかねもいとほゆく、人聞き情なくやと思し起して野宮にまうで給ふ」。**秋の花皆衰へて** 云々 同じ巻に「秋の花皆衰へつゝ、浅茅が原もかれ〳〵なる虫の音に、松風すごく吹き合せて」。かれ〳〵は臘の喪れんとする様。**居** 源氏。**言葉の露** 葉の縁にて露とつけ、言葉の潤。**桂の御禊** 齋王伊勢へ立つ、川に臨みて御禊の事あり。桂は山城國葛野郡桂河畔の桂の渡(又西河とも)。賢木の巻に「十六日、桂川にて御禊したまふ」。**白木綿かけて** 祓を忘と云ひ掛く。白木綿は楮の皮にて造り神かけにか。**身は浮草の** 小町の歌「わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなむ」を借り、源氏と別れて頼るべなきを身の心がらとよく齋王くら祓の料。

と共に伊勢物語の旅に赴くを叙す。**鈴鹿川** 伊勢國鈴鹿郡三子山に發し伊勢灘に入る川。此所にも御息所が源氏の居に賜りたる返歌に「鈴鹿川八十瀬の波にわけわびぬ伊勢をぞ淹かの思ひおこせるを」(賢木の巻)。歌の意は鈴鹿川を渡るにつけても我は神の波にぬれ、又は涙にぬれつゝかなしき伊勢路までも思ひやる人はあらまゝとかなり。**言の葉は** 云々 言ひかはしたら通りにはなるゝといふ意にて際り、「葉は」の言を「母」に特用して、賢木の巻に「親そなりて下り給ふ例も殊にかりれば」とあるを引きて云ひつゞく。**多氣の都** 齋王の御在所、伊勢國多氣郡竹郷(今の齋宮村)に存りし故此名あり。**恥かしのもりて** 恥かしを山城國乙訓郡に在る羽束師の森に言ひ掛く。千載集の長歌の中に「世の人聞きはばかしのもりもやせと思へとゝ」云々。**なき身** 此世に亡き身に掛く。**跡の名の** 云々 後世に其名のみ残る宮といふを御息所に掛く。**夕月夜** 夕月の出る巻れぬた。**二柱** 鳥居の二本の柱。**かたしく** 袖を片方下に敷くこと。**苔衣** 僧衣。**草、も**

しろ 草生を延に見立てし語。**思をのべて** 延をのぶるに掛く。心ゆくばかりにの意。**花車** 花やかなる車。「野の宮の」以下一首の和歌の枕詞。**網代の下簾** 網代は半車の一種。竹又は檜を薄くはぎたるものを編みて車蓋を張りたるもの。高貴の人の車なり。下簾は車の前後の簾の内より外へ長く垂らし出す帳

茂の祭の車爭ひ 賀茂の齋王二度目の御禊の日物見に出でし葵上の下部と、通夜命はせなる御息所の下部と車の主て所を爭ひ、御息所の車を人給はれの奥へ押しやりたる事葵の巻に見えたり。之を車爭ひといひ、以下此事を引く。されば正しくは祭の日には非ずして、此祭事に從はん爲の御禊の日の出来事なるを、同じ巻の次の雲に祭の物見の事を記せるより作者の混じたるべし。**白露の** 云々 知らぬに掛く。東屋の巻の歌の句に「朝露の所せきまでに」とあるを白露と一て借る。**物見車** 見物の車。

葵上 源氏の北の方。葵の花の如く盛りなる意にかけて時めくと寄らす。**身は小車の** 云々 玉葉集に「花盛りちりに駆すたるふとあるを借りて、葵の巻に「これは更にさやうにさしのけかどすべき御車にもあらずと、口ごはくてをふれさせず」とある意に通はす。**人だまひ** 人に除けて乗らの乗り馬の異におゝやられて」云々。**力もなさ** 力車といふ語あるを逆にして、車も身も駆き意ど知らぬ」とあり。**報の罪** 前世の罪業の果報の意。罪の報といふべきを特倒して用ひたり。**うしの小車** 身は牛の車にかけ、輪廻の意にそめぐりく来てと續く。**亡女執** 速妄して執着すること。**森の下露** 月のもとに掛く。「野の宮の」以下一首の和歌の縁なれど典據

不明。身の置き所も　露の身の志にて来け、身の置く所、露の様子。賢木の巻に「とかく立ちわづらふ」とあるに調をとる。庭のたくずまひ　庭の荒くすさまれ　賢木の巻に「庭のたくずまひ」とあるに調をとる。よそにぞかはる　絵の所にては見られぬ特異の志。同巻に「他にはさま変りて見ゆ」。假なる　假そのかりそめ。賢木の巻に調をとる。露うち拂ひ　葵の巻の源氏の君の歌の句。其人　源氏の君を指す。ゆくゑ　行くかたゆく。賢木の巻に「松虫の鳴き」。誰松虫の　誰待つと鳴く。共心に詠みたる歌多きを賢木の巻に「松虫の鳴き意。露の縁語。からしなる聲もきこえず知りがほなる」とあるに取り合はせて限る。りん〳〵　松虫の鳴く音。神風や　伊勢の枕詞。内外　内宮外宮。出で入る姿は　鳥居を出入し居る界の道を脱せざるなれば、神も納受あらまほしとなり。伊勢物語の歌「思ひしと御手洗川にせしかど御禊神は受けずもなりにけるかな」を裏におきて解る。大宅　三界の不安なる家宅に喩へたる語。

野宮

九月　シテ　ワキ　僧　六條御息所ノ霊（前ハ里女）

早付

こゝは諸國一見の僧にそはべる。われ此程都よりひて。洛陽の名所舊跡殘なく一見仕りてはべる。又秋も末なりゆくべば。嵯峨野の方ゆかしくは間。そも越えて一見せばやと思ひはべる。これなる森をくゝ尋ねてゆくべば。野の宮の舊跡とかや申

い程よ。年頃縁おぼつかなく見せぎやと思ひい
かん上 われ此森より来て見れば。黒木の鳥居小
柴垣。昔より変らぬ有様なり。されども何と
ひたる事やらん。よくかつる時節よ
糸りあひて。拝み申さぞありがたき
下歌中 伊勢の神垣。隔なく。法の教の道を
ぐよ。こゝよ尋ねて宮所心も澄めるよ

下 べき心も澄めるよべかな シテ次第上 花よ
あれとし野の宮の。花よあれとし野
の宮の。秋より後いかいらんなら サシ上 をり
しもあれ物の寂しき秋暮れて。猶志
をりゆく袖の露。身を砕くなるよま
ぐれ。心の色はおのづから。千種の花よ
うつろひて。衰ふる身のならひ哀れ

下歌中
人こそ知らねけふ毎よ昔の跡よ立ち
上歌
帰り・野の宮の森の木枯秋更けて。
森の木枯秋更けて身よ志む色の
消えぬべり。思へぞ古へを何と信夫の
草衣。さてもあらぬ假のせよ。ゆき
とゝ。怨めしけれ。
早笛
われ此森の蔭に居て古へを思ひ心を

まゝ。いとなまめける女性
一人忽然と来り給へいらるる人とて
まゝ。いらるる者ぞと問せ
給へ。其方をこそ問ひまゐらせべけれ。
これは古へ齋宮よ立たせ給ひし人の。
假よ移りまゝ野の宮なり。然れども
其後は此事絶えぬれども。長月七日の

げふいよ。昔を思ふ年ごろ。人々(中人)知
らぬ宮所を清めぬ。神事をあるを所よ。
行くへも知らぬ事なるゞ。来り給へ
悲(ヒ)あり。とく〳〵帰り給へとよ 上(ヤ)
やこれ苦しからぬ。身の行く末も定
なき。世を捨ゞの数なるべ。さてく
こゝ去りし跡をげふごとに昔を思ひ

給へ。謂(カタル上)いいなる事やらん 上(シテ)光源氏
この處よ詣で給ひしーハ。長日(ナガヒ)七日(ナノカ)の日
げふよ當れり。其時いさゝか持ち給ひし
榊(サカキ)の枝を。忌垣(イガキ)の内よさし置き給へぞ。
中人
ち息所(ミヤスドコロ)。とりあへぬ。神垣(カミ)に杉
中人
ーヲ一イキ一イ(何)
もあるものを。いとまなくて折れる榊(サカキ)
ぞと。詠み給ひしもげにぞ 下(ヤ)げよ

●小盆

面白き言の葉、今搆ち給よ榊の枝も。昔よ変らぬ色よのう　昔よ

変らぬ色ぞとハ。榊のみとて常盤の蔭の　日本上　森の下道秋くれて　紅葉

地上歌　散り　濃草原も　うら枯の。草葉よ荒る野の宮の。草葉よ荒る野の宮の。跡ばかつかーきとよしも。

其長月の七日の日も。けふよめぐり来けり。ものはらあや小柴垣いとかりそめの御仮屋まひ今も火焚屋のかをる。光ハ我ゞ思ふちよある色やゝよ見えつらん。あらさみ宮所あらさみ。此宮所。猶こゝ古息所のいとし懇よ御物語りゆへ　地クリ上　打掛　抑この古息所で申

●サシフセ獨吟

きハ。桐壷の帝の門弟。前坊と申し奉
りしゞ。時めく花の色香まで妹背の
心あさからざりしよ

●會者定離

の習もとよりも　地　鶯くべしや夢ゆの
せて。程なくおくれ絵ひけり　ツレ　さてしも
あらぬ身の露の　地　光源氏のわりなゝ
くも忍び忍びよ行き通ふ　ツレ　心の末の。

地　拍子
思ひはて給ふ

おぞやらん　地　又絶え絶えその中なりしよ
つらきものよハさまでかよ思ひはて給ふ。
はるけき野の宮よ。分けわり給ふ所心
いと物哀なりけりや。秋の花皆衰へて
虫の聲もかれ〳〵しよ松吹く風の響
までも。寂しき道をかなしき秋の悲みも
果なかりしよ。かくて君とよ。詣でさせ給ひ

つ。情をかけて様ごの。言葉の露も。
色ゝの門心のうちぞ哀なる　其後
桂の門被　白木綿かけて川波の。
身は浮草のよるべなき心の水よ誘ひ
して。行くへも鈴鹿川八十瀬の波よ
ぬれくぞ。伊勢までも誰ゝ思ひそんの。
言の葉は添ひゆくこともためなきも

のを。親とのの。多祁の都路よ赴きし
心こそ怨なりけれ。げよや謂を問く
からよ。唯ゝ名ならぬ門氣色。其名をな
のり給へや　名のりても。ひなき身
とて恥かしのもりてやよそよ知られ
まじ。よさらば其名も無き身ぞと訪
ませ給へや　こきさ身と向けば不思議

やまさてハ此世をはらるくも　去りて
久しき跡の名の　古息所ハ　われ
ありと　夕暮の秋の風。森の木の間
の夕月夜。影かすてらるる木の下の。黒
木の。鳥居の二柱よ。立ち隠れて失せよ
けり跡こそ隠れ失せよけり　中入
かたしくや。森の木蔭の苔衣。森の

木蔭の苔衣。同じ色なる草むしろ。
思ひのべてよもすがら。かの所跡を。弔ふ
とやかの所跡を弔ふとや　後シテ　野の
宮の。秋の千種の。花車。われも昔よ。
めぐり来よけり　不思議やな月の
光もかすらなる。車の音の近づく方を。
見れば網代の下簾。思ひかけざる有様

あり。いうさま疑ふ所もなく。古息所まで
まままでかさもあれいうある車やらん

シテ　いうある車と問せ給へば。思ひ出でたり
其昔。賀茂の祭の車爭ひ。まハ誰て
も白露の　ワキ　所狭きまでこそ並ぶる

シテ　物見車の樣ごよ弥よ時めく葵の上の
ワキ　車とて人を拂ひ。こそち騒ぎたる其

中よ　シテ　身ハ小車のやう方もなしと答
へてこそ置きたる　ワキ　車の前後よ
シテ　やつとよりて　地上歌　人ごと轅よりつきつ
人だまひの奥よ。おしやられて物見車
の力もなき身の程ぞ思ひ知られたる。
よしや思へど何事も。報の罪よよも
洩れじ。身ハ猶うしの小車のめぐり

●仕舞

めぐり来ていつまでぞ妄執を晴らす日
給へやこの妄執を晴らす日給へや。昔を
地上 思ふ。花のそで
地上 月よとやなへも。氣色
序ノ舞 ●野の宮の月も昔や思ふらん
地上 ●景さみしくも森の下露森の下露
シテ 身の置き所も。もやうは昔の庭の
地上 たゞずまひ
シテ よそよそのもやうは氣色

も假なる
シテ 小柴垣
地 露うち拂ひ。
訪ひし人もわれも其人も。唯夢のせと
ゆくあとなる誰松虫の音ハ。りん
りんとして風ぞ花とたる。野の宮の夜
もすがら。つかしやこゝハもとより
破ノ舞 ちゝ
かたゞけなくも。神風や。伊勢の内外の
鳥居よ出でのつる姿ハ生死の道を。神ハ

受けぎや。思ふらんと。車よりちて。
りて。火宅の門を。出でぬらん。火宅
の門。

錦木

解題 古く別名を錦塚といふ。昔陸奥に、恋する男、錦木と称へて彩りたる木を女の門に立て、思ふ心を傳へたりといふ傳説と、狭布の細布の古き説とを取り合はせ、伊勢物語、古今集、其他の多数の和歌を文の間として綴りたる、恋物語の曲なり。主として袖中抄に基きたりと見ゆ。曲流、世子六十以後申楽談儀、歌舞能脱記、一休題道等に見ゆ。既本作者注文、及び二百十番謡目録に世阿弥作とあり。但、申楽談儀の世阿弥の作曲の中には挙げず。春日拝殿方諸日記に寛慶四年二月十日の勧の様楽に金春太夫が勤めたりと見ゆるもの、傳へられたる上演の記録の最初のものなり。

謡ひ方梗概 松虫、鉦鼓などに類したるものにて、さして重くは扱はず。**シテ** 前は直面の男なれば、却へず又高からず、辛直に八キ〳〵とあるを宜しとす。決第は稍低めに取りて詩に出で、**サシ**よりさらりとなり、**下歌**を軽かゆるやかに、**上歌**は初を軽からめやうに起し、漸次すらりとして、淀やかに流れぬを程に謡ひ行く。**ワキとの問答**は謡着ありて唯りと承け應へ、問答の進むにつれて注も亦少しづゝ進め、**ツレとの掛合**に入りては稍かゝつて承け渡す。昔より此所の習にて、ワキの詞は謡めきたる所なれば、穏やかに唯りと扱ひ、「さる程に遠ふべき」云々の句にて聊か心持を変ふ。「おういでくさらば」云々は下目に取りて品好くかゝり、「秋寒げなる夕まぐれ」は地味に寂しき味はひあるべし。後は前よりも注や、早めに、緩下して唯りとあるべきも、詰きに逼ぐれば荒々しくなる。「今こそは」よりは一聲の調子に更へて、以下すらりたのキくはサシの調子にて稍大きめに陸やかに謡ひ、「今こそは」よりは一聲の調子に更へて、以下すらりと扱ひ、「いふならく」云々を更へて抑へめに唯りと出で、「かはらざりけりかはらざりけり」と気をかけてヅカ〳〵と詰らぬやうに、「恥かしや」と向へ取る。**問答**より**掛合**に掛けて注を高さぬ程にてさらりと承け渡し、暇次に気を来せて行く。**サシ**はすらりと、「舞をまひは乗りをたしかに」「嘱ろは」も同様にて「細布の」を少しらりめに、「うれしやな」以下は唯りと、「舞をまひは乗りをたしかに」「嘱ろは」も同様にて「細布の」を少しさらりと扱ふ。**ツレ** シテを抜けて全句を害はぬやうツレらしく謡ふ。一人謡ふ處はや、聲高にさらりとあるべし。後は「いかにお情」云々とサシの調子にて出で、発句なれども物柔心なるべし。後は詩に飾り気なく謡ふべし。**ワキ** 稍詩に飾り気なく謡ふべし。**地** 初の**上歌**はさらりと出で、「歌物語」と稍唯り、らかなる所あるべく、以下**掛合**總て心して謡ふべし。「はづかしやを少し謡ひ終め、さて「げにや」以下を前へ戻す。「狭布の細道」云々は下歌の調子に更へてさらりと承け渡し、来り、来らずの謡ひ分け心すべし。
めやかに謡ひ表すべし。後は**掛合**はシテを承けてさらりと承け渡し、来り、来らずの謡ひ分け心すべし。

上歌「きりはたりちやう〳〵」は前へかけて出て、廻み息く謡ふ。クリは喉りとして運び好く、サシ以下すらりと、夕せはさらして前へすさらりめに出で、上歌箱を少し引き立て、「おれも門違に」よりは喉決氣合をかけゆき、「つれなつれなや」を挽みにすかりと謡ひ切り、「錦木は」を引き立て、羽に出づ。「人に知られぬ」云々は稍確りと附け、「雪を廻らす」より健やかにさらりと、以下キリに直り帰り無く調子よく来りて謡ふ。

注意すべき謡ひ方

十二枚裏四行目のシテの謡「今こそは」の「は」の節は三ツエリの変体にして、謡ひ形は稍似たれども、中の音を浮かせ、春と節をどんと落したる所より謡ふものにて、三ツエリとは聊か揚に於て著しき相違あり。同じ節山姥にあり。又十三枚三行目の「細布の」の節は他に例なき特殊のものなれば、能く味はひて学ぶべきなり。

評解

しのぶ 伊勢物語の歌「しのぶ山忍びて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく」を借りて陸奥に遊ばんとする意を綴る。信夫山は岩代國福島市の北にあり。信夫、忍ぶ、音通するより古来多く歌詞に用ひらる。**陸奥** 磐城岩代以北の國々の古き總名。**いづくにも**云 と 續拾遺集に「いづくにも心をとゞめぬ初時雨」云との歌あるを借り、豈千禪師の「身は雲水の如く悠々として去来す」といへる詞に通はせて綴る。**雲の旗手** 靡ける雲。古今集の歌「夕暮は雲の旗手に物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」に詞を借る。**空も重なる** 云で 空遠き意と、夕暮の数の重なる意とを兼ねて云ひ、重なる衣と次謡に續く。**狭布の里** 古く狭布の郡とも書ふ。されどもこれを地名としたるは藤原清輔の奥儀抄に「けふの細布とは陸奥のけふの郡より出でくる布なり」と記せるが初にて、顕昭は袖中抄に之を打ち消し「陸奥の郡どもの中にけふといふ郡無し」と断り、一條禪閣赤此説を襲へり。元来狭布は廣布に對して幅狭き布を云ひ、古くより陸奥の土人が調貢に供へし事、太政官符、延喜式等に見えたれば、土地の名に非ざるは明なり。吾妻鏡文治五年九月十七日の條に「安達駒千疋、希婦細布二千端、糠部駿馬五十疋」とあるは一見地名の如く見えざるに非ざれども、實は文字を当てたるに過ぎず。更に後世の書、永慶軍記に「去祠の國より寄せし軍勢は先づ鹿角郡に打ち入り、狭布里、錦塚を陷て」云々と見えたるは明に地名として現はれたるものなれども、異等の書をば卜ふ後世羽後國鹿角郡古川の地となすは全く假託に過ぎず。然るを中古一般に地名の如く云ひなしたるより、謡にも地名として作れりと見ゆ。**細布** 袖中抄に「狭布と書きて、やがて歌にけふとよみて、細にほそぬのとよむなり」とあれど、「狭布のせばぬの」と云ひたる例も多し。要するに狭き細き布の謂にて、単にけふとも云ひ、それのみにては意明ならざるより、「けふの細布」または「けふのせばぬの」と云ひしなるべし。謡には布を織なる意にてとり〳〵と續け、織る物の縁にて錦の謡を起す。**錦木** 昔陸奥の風俗に、男が女に逢はんとする時、女の門口に立てたりといふ、まばらに飾りたる五色木。陸奥の[illegible]逢はんと思ふ男の立つる木をば疾く取入れつれば、其趣は[illegible]顕しくなり。逢はじと思ふ男の立つる木をば、いかにも取入れぬ程に千束を限りにして三年立つるなり。それに猶取入れねば、思ひ絶えて止むと云ふ。此事袖中抄に出づ。もとより一時流行したる風習にはあれど、興味ある説話なれば、謡曲作者が採りて題材とせしもの。**名たて** 悪しき名の立つこと。錦木を立つるに掛けて[illegible]なり。[illegible]後撰集の歌に[illegible]

陸奥の 云 古今集(伊勢物語にも)の歌「陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに」の[illegible]を借る。**われからと** 云 古今集(伊勢物語にも)の歌「海人の刈る藻に住む虫のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」に詞を借る。[illegible]

いつまで草の 云 いつまで草は壁などに生ずる小さき草。[illegible]古今集の歌[illegible]を引けるにや。**衣手の森** 山城にある名勝。[illegible]の縁語とす。**起きもせず** 云 伊勢物語(古今集にも)の歌「起きもせず寝もせで夜を明しては春のものとてながめ暮しつ」を引けるなり。[illegible]

思はぬ人を 云 [illegible]**いたづらに** 云 [illegible]

流れては 云 前句に詞を重ね、古今集の歌「流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中」を引き、[illegible]**名にしおふ** 有名なる。**色こそ変れ** 云 [illegible]

千度百夜 千度は前に引きたる無名抄に、千束まで立つるとあると同意。百夜は歌学書に小野小町に[illegible]**鳥の羽にて** 云 [illegible]鳥の毛にて織りける布[illegible]云々。**機ばり**に

かけたる布の幅の義。長谷珍、全文に陸けて「まからぬ物にて織る布なればはたばりもせばく」云々。受けて次句を出す。**中々の事** 其通りといふ意の時代語。**日毎に主て** 長谷抄に「日毎に一束ずつの女の家の門に主つると」云々。**千束とも** 詠み「錦木は千束になりぬらん」云々と詠みたる歌あればいふ。千束はこゝには千本の意。束は稍なるべし。**駒あひ難き** 長谷抄の前に引きたる「はたばりもせばく」といへる続きに、「ひろも短ければ、上に著ることはなくて、小袖などのやうに下に著るなり。されば脇中ばかりを陸して駒まてはかゝらぬよ」と詠むなり」と見ゆ。それに男女の違ひ難きを重ねていふ。伏見院の御製に「世と共に駒あひ難き我が恵の たゞひもつらきけふの細布」。次の能因法師の歌も同上説法なり。**錦木は** 後撰遺集の能因法師の歌。袖中抄にも出づ。**機ばりもなき身** 直には取るにも足らぬ身といふ程の意。**岩代の松** 紀伊国に有り。云本なれども陸奥の岩代に寄せて文の続とし、松に持つの意を含む。**夕日の影** 今は「セキシフ」と読へども若は「ユフヒ」と読みしには昨ろか。前後の文、旅情と持つと云はん（夕に堪く）と聖ひて宿に帰らんとする意の如くも解せら る。以下、西の言にて錦木に陸く。**錦塚** 謡曲以前の書に證徴無し。錦木塚の謂なるべく、女郎花の男塚女塚、飛田武塚の虎女塚等より思ひつきたる作者の創意なるべし。**かの閨に** 拾遺集に「かの岡に草刈るをのこ」かな刈りもありつゝも 刈るとあるを誤る。**道芝の** 狭衣物語の歌「寄ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露」を引き、道に傳道の意を兼ねむ。**眞如の玉** 長恨歌「長恨は長安にして常住不変なるを言ふ仏教の語。其国瑞なし。其玉を得たりと云ひて珍宝とす。宛の玉に寄せて出き後に入らんことを願ふ意とす。**足びきの** 山と云はん為の枕詞。足の速ぬ場所。恨り得ずして さまよふ実路に擬す。**松桂に鳴く鳥** 白氏文集の山宅の詩句「鳥鳴松桂枝」、紅葉賀に「夏野ゆく 牡鹿の角の束の間 極めて短き時間。新古今集の歌に「夏野ゆく 牡鹿の角の束の間も忘れず思へ妹が心を」。**聲佛事** 讃経。**一樹一河の** 平家物語に「一樹の蔭に宿るも前世の契浅からず、同じ流を汲むも 他生の縁なほ深し」。他生は前世又は後生。**値遇** 遭ふこと。こゝには遭ふべかりし宿縁。**二世** 後世と来世。夫婦の契に云ふ。

遇ひ難き 三年通ひても女に遇ひ難かりしを怨歌に遇ひ難きに掛く。法華経に「百千万億劫難値遇」。**尾花がもとの** 万葉集に「道の辺の尾花がもとの 思ふ意に 通はせ、芒の穂よりと陸く。**塚のまぼろし** 東の間の 塚と含む。**いふならく** 謡曲に見えたる高野山親王（盛家記には 延喜聖主）の歌「陸へ聞くには、人地獄に陸すれば竜戒上下の別なしと の意。参考は地獄、利刹は印度の王舎城、青陀は同じく農人奴隷の名。**機物** 織 **かきくらす** 古今集（伊勢物語にも）の在原業平の歌「夢なりしか世人之を定めまとの意。「夫は錦木を運べば」とあり。いづれも「夫」は原作に「男」と作られしものゝ 説傳なるべし。底本は侍言の引文には「男」とせり。類似の浮情藤枝にもあり。**きりはたりちやう** 織と織る音。織編虫の鳴に云ふより其出の 名に続く。謡曲創作時代の通用語なるべし。**つゞりさせ** 古今集の歌に「秋風に陸びぬる 虫の音聞くとて 思ひ絶ふ 物思ふ意。**千種の糸** 様々の千草を染め 秋の千草を染め。**ことわざ** 事。**執心** 執着する心。**一条妙典** 妙法蓮華経。**懺悔の姿** 過去の悪業を悔い改むる事を具体的にいたる姿の意。**中垣** 垣根。**埋れ木の** 錦木につきての歌は見当らず。夫木抄の頭部の歌に「伊勢の海の磯のまてかたらねども 恵のまめきもいとかなりけり」。此まめきは心馴く意なるべし。**流れも色に** 連ふ事無きと流に掛け、流に 流れ寄りしものかと云ひつゝ。**恵の深き** 千載集の歌。末句「まろねせんとは」。女、まひ寄りたる男の心を知らんとて、車の綱を 主て、夜毎にこてに来て詠へと云ひしに、男詞のまゝに九十九夜まで通ひて、通ひし夜毎の数を綱に書きしが、百夜といふ夜親族に死にたち降りて既に来ず、其夜女が「暁の綱の 数なり。されども此男女の物語は古今集の恵の歌「暁の鳴の羽がき百羽 かき君が来ぬ夜はわれぞ数かく」を陸へ誤りて附会したるものに過ぎず。**ありくて** 其まゝにありて 三とせと云はんとして、洗をみちのくに陸て、秋布に今日を掛けて陸く。**くれなゐ** 年の暮ると 紅にかく。**たまさかにも** 稀にもの言ふ。後の 恋の意。

錦木は云〻袖中抄に出でたり歌、鸚鵡の盃（逢ふの音と掛りて出す、鸚鵡は盃の名。）雪を廻らす（奇の地妙なる廻雪の袖を舞せば云々。）夜遊（夜の楽舞。）あさぼらけ（明らさまの意と、朝の意とを兼ぬ。）

四番目
累二番

ワキ次第上（三人）
ヨワク

錦木（ニシキギ）

九月

ツレ　女ノ霊
シテ　男ノ霊
ワキ　旅僧

げにや聞きても信夫山。げにや聞きても信夫山。其通路を尋ねん　ワキ行　これは諸國一見の僧にて候。われ未だ東國を見ぬ程に。此度思ひ立ち陸奥の果までも修行せばやと思ひ　道行上（三人）　いざ　オ切ヤ　いざ　オ切ヤ　行く雲の心とめしと

行く雲の。旗手も見えて。暮の空
も重なる旅衣。おくふそなたら陸奥の。
狭布の里とも著きよけり。狭布の里
ともつきよけり（ワレニ人ノ歌ノ上ニ）
ちりの。狭布の細布。狭布の細布をとり
名だてなるらん（ワレニ人ノ歌ノ上ニ）
ぎり誰ゆゑ。紅ぞめ。われからと。

陸奥の信夫もぢ
草の。いつまで。思を干さん衣手の。森
の下露起きもせず。寝もせでよもを
明してい春の。ながめもいかならん。浅ま
しやそも幾程の。身ぞあれば。なほ待
つ事のあり顔。て。思やぬ人を思ひね
の夢。ゆ現ゆ寝て。覚めてから。こしや

●小話

一行は、憂恭の習なるいたづらよ過ぐる
年月、心は多けれど。身よるまで事は流れ。流
れて早き月日なる流れて早き月日
なる。上歌げよや流れて。妹背の中の
川を間く。妹背の中の川を間く。吉野
の山いづくぞや。こゝに心の奥ゝ陸
奥の狭布の郡の名より負ふ。細布の

地拍子 細布の

色こそ変れ錦木の。千度百度徒よ。
くやしき頼なりけるぞくやしき頼
なりける。不思議やなこれなる市人
を見れば。夫婦と思しくて。女性の持ち
給ひたる鳥の羽にて織りたる布と
見えたり。又男の持ちたる美しく色
どりかざりたる木なり。どれもく

不思議なる貴物かな。これ何と申し
たるものにてゆゑ　ツレ　これハ細布にて
機ぞり　シテ　これハ錦木にて
色どりさざれる木なり。どれも〳〵
當處の名物なり　ツレ　これ〳〵見されゆく
げに〳〵錦木細布の事ハ承り及び
たる名物なり。さて何ゆゑの名物にて

ゆやらん　ツレ　うたての仰ぜや。名に負ふ
錦木細布の。其ゆゑもなくよとまでハ。
聞きも及ばせ給ぬよのう　シテ　いや
いやそれも所理。其道とよ縁なき事
をば。何とて出ろうめさるべき　ツレ　見たて
まつれ世を捨人の。憂暮の道の色
よそむ。此錦木や細布のゆゑしめさぬハ

理なり　あらおもしろの返答や。
さてく錦木細布とは。慈路よりの
なる謂よのう　あるくの事三年
まで。立ておく數の錦木を。日ごとに
立て、千束にも詠み　又細布に機
たり狭くて。さぞ身をも隠さねば。
胸あひがたき恋にも詠みて　恨も

寄せ　石にも立て、　遠ぬを種と
詠む歌の　地上歌　錦木。
打ちよけれ。立てあるぐらにて
狭布の細布。胸合せどやとさしも
詠み　細布の機どもあき身にて。
歌物語はづかしや。げにやなのみは岩
代の。まつの言の葉とり置きしは日の

仁王寺に宿りよいぎや情らん宿
場も錦木の。宿りよいぎや情らん。
りよいぎや情らん。　ワキ　なほく錦木
細布のいとしい物語りゆへ　シテ　昔より
此處の習ひて。男女の媒まゐ此錦木を
作り。女の家の門ゆ立つる志るしの木
なれば美しく色どりかざりてこれを
錦木といふ。さる程ゆ達ふべき男の錦

木をば取りのれ。達ふまきをば取り
のれねば。或は百夜三年までも立てゝゆ
よりて千束をも詠めり。又此山陰ゆ
錦塚とていふこれとて三年まで錦木
立てたりし人の古墳なれば。取りおく
錦木の數をもゆ塚ゆ築き籠めて。
これを錦塚と申ゆ　ワキ　さらば其錦塚を

見て。故郷の物語よ志ゆべ一教へて給
たりゆへ　おらでいとくさらば教へ申
きん　こなたへ入らせ給へとて。夫婦
の者ハ出えよとそ。その旅人を伴ひつ
狩布の細道分け暮して錦塚ハいと
くぞ。その岡よ。草刈るをのとゝしして。
人の通路あきらかなる教へよや道芝の。

露とゞ誰よ問やまし眞如のまハいと
くぞや。拾めたくぞおぼゆる　秋寒
げなるまくれ　嵐木枯村時雨。露
分けかねて見ぬ山の常陰も物さび
松桂よ鳴く鳥ハ菊の花よ隠るなる。
狐栖むなる塚の草。もみぢ葉そめて
錦塚かとこれぞ捨て。塚の内もぞ

拾めたくぞ

地柏子板
高く
三字
三字持合フベシ

ゆくよけるを。夫婦ハ塚よりのりよけり（中入）

（地謡）牡鹿の角の束の間も。牡鹿の角の束の間も。寝られんものか秋風の。松の下陰夜もすがら。聲佛事をやなりぬ

（ツレ上）らん聲佛事をやなりぬらん（ツヨク出端謡）しるよ

お僧。一樹一河の流を汲むも。他生の縁

ぞと聞くものを。まして。や値遇のあれバ

とそ。かく宿りまする草の枕の。夢ばそ

賢ま。給よ。あらたうとの古法やな

（シテ上）あらありがたの。仏弔ひやな。こせとかね

たる契だよも。さしも三年の日數積る。

この錦木の思ひかたき。法の値遇の

ありがたさよ。（上）でくゝ姿を見え申

さん。今とそ。色よ出でぬん錦木の

三年(ミトセ)に過ぎぬ古への夢(シテ)は夢(ユメ)よ。
今宵(こよひ)三年の値遇(あひあ)よ。今ぞ見(み)るまれて
地上(ちじやう)尾花(をばな)もとの思ひ草(ぐさ)の蔭(かげ)より見(み)え
たる塚のまぼろしよ。現(うつつ)に出づるを怪
(あやし)み見(み)て。
覚(さ)めよ
塚(つか)の底(そこ)よ。奈落(ならく)の底(そこ)よ。
入りぬれば。利(り)も首(しゅ)庵(あん)も。かやらざり
けり。あら。恥(はぢ)かしや

日本かれ上

不思議(ふしぎ)やおさも古塚(ふるづか)と見(み)えつるぞ。内(うち)は
かくやく燈火(とうくわ)の。影(かげ)あきらかなる人家(じんか)の
内よ。機物(はたもの)を立(たて)て錦木(にしきぎ)を積(つ)みて。昔(むかし)を
現(うつつ)をよそほひたり。これは夢(ゆめ)か現(うつつ)か
ツレ
ヨク
かきくらす心の闇(やみ)よ惑(まど)ひしき。夢(ゆめ)現(うつつ)
とよひと宮(みや)あよ
げにや昔(むかし)は業平(なりひら)も。
せ人宮(ひとみや)めよとぶらひしものを。夢(ゆめ)現(うつつ)と

旅人ここそよく〳〵知らしめさるべけれ
より夢なりとも現なりとも。はやく
昔を現して。夜もすがらわれに見せ給へ
とて〳〵昔を現すんと。月影草の月
の夜よ。女ハ塚の内より入りて。秋の
心も細布の。機物をたて〳〵機を織れば
夾ハ錦ぞとり持ちて。閉たる門を

敲けども。内より答る事もなく。
窓より音をするものとてハ。機物の音
秋の虫の音。向けば夜聲も。きり
はたり。ちやう。地上歌に
はたりちやう。きりはたりちやう。
ちやう。機織虫きりぐす。つゞりさせよ
となく虫の。夜のたゞめを勿。徒ひそおのゞ

●サンシクセ獨吟

まむ野の。千種の糸の細布織りて
とらせん　げにや陸奥の狭布の郡
の習ひて。處からある事業の。せまたぐ
ひなき有様やな　●申しつるだに
はべりあるよ。なほも昔を現せその
お僧の作に隨ひて。織る細布や錦木の。
千度百夜を待つとても此執心よりも

盡きじ　地　然れども今遇ひがたき縁
によりて　地　物語の。功力を
得んと懺悔の姿。夢の中にまでも現
もあり　●夫れ錦木を運べば女は内に
細布の。機織る音にて内に
まで聞こえけれども。たゞひとり内外に
あるぞと。知られ知らるる中垣の。草の

ぞ。ハ甚まして。夜ハまでよ明け
ければ。をどゝと立ち帰りぬ。さる程よ。
思の数も積りきて。錦木ハ色朽ちて
きるから。さよ埋木の。人知れぬ身ならば
かくて思ひもてまるべきよ。錦木ハ朽つ
れども。名ハ立ちそひて。達よ事ハ。あみだ
も色よ出でけるかや。窓の染木とも。此

思ひきや

ニウシテ上ル

錦木を詠み。ありし。思ひきや。撮の
はづかきつめて。百夜も同じ
まろねせん。と。詠みだよあるものを。
せめて。一年待つのみ。二年あまり
ありありてはや陸奥のけふまでも。年
くれぬるの錦木ハ。千度よ。あれ。ハ
づらよ。われも門邊よ立ち居り錦木と

そもよ打ちぬべき。袖の涙のたまさかに、よもぎをや見みえ絵をぬぞ。偖いつ[illegible]
三年に満ちぬ。あらつれなつれなや。
上ヒ又ハ シテ上 錦木に千束よ。あり[illegible]ぬ。今ここそ
地 人よ知られぬ。国のうち見め。 シテ中 [illegible]
や。今宵鶏鳴の[illegible]ぬ。 地上 雪を
打上 めぐらす。舞の袖かな。舞の袖かな

●仕舞 男舞 打上 ●舞をまひ。 シテ中 地 舞をまひ。歌をうたふ。
も妹背の様たつる。錦木 シテ中 織る。
地キリ上 細布の。 打上 そりぐさまぐの夜遊
の盃ようりて有明の。景恥かしや
恥かしや。あさましやなん。 シテ 賢めぬ
先こそ夢よ人なるもの。賢めなば錦木も
細布も。夢よも破れて松風颯たる。

又ハ 塚とぞ申りけるとも

あしたの原の野中の塚とぞ申しける。

唐船

解題 一に唐船とも記す。唐土の祖慶官人といふ者、年久しく九州箱崎に捕はれ居たりしを、孝心深き二児遥に尋ね来り、数多の宝に代へて連れ帰ることを請ひ、連れ帰る事を許されたる二子の喜びと、日本にて生れし二幼児の共に連れ行く事を許されざる悲みとの中に立ちて、父官人去就を決し兼ね、先に海に投ぜんとする一際の悲劇を緯として作れり。二百十番謡目録に[illegible]作とし、謡本作者註文に作者不明とせり。唐船曲舞は此曲の時好に投じたる趣向にして、父に従ひ行きたる日本の二幼児が残る母を慕ひて日本に来り、狂乱せる母に邂逅して唐土に伴ひ行く事を作れり。

謡い方梗概 老父の喜びと悲みとに四子の異る情を配したる曲とし、情の変化複雑なれば、茲に重きをおきて謡を運ぶべし。盛

シテ 今は年寄しく衰へたる体なれども、曲趣ある異国人の心にて何處とも無く品格あるべし。まづサシを寂びてさらりめに出て、一聲にて断ち切り立てゝ、これは唐土と云ふを耳がサシの調子にて素直に起す。次下詞と節と何れも拍子に従つて異心を表し、下歌は拍子に合せてしつとりと止む。ロンギは淺り進み行く處なれば、意を騎主すやうにてさらりめなるべし。ワキとの問答は長上に對する心を胸におきて、拍子に従つて情の変化を表し、「やあいかにあれなるは」と云ひしは一息間をおきて大きやかにすらりと動いて言ふ。唐子との掛合ごれは寺かゝ手に心得ありて「明けやせん」を揺り上げ、一段の嘆情たつぷりと運びに渡す。次の謡は少し運みたちたる心に言ひ、曲舞に入りて「呼ぶ子もあれば」と揺り、中に止まると少し情運り「父ひとり」と張りつめたるもの、猶ふるしく斑ふべし。次遠一曲中の要所にて、行くに行かれず止まるに止まりえざる表き謡の長き心の変化を写と謡はざるべからず。クセの上羽は思ひ餘りたる心なるべし。兄のこれは真ぶの一句、子わかと思ふ喜びを表すなれども、構へをもちて静なる老子の調子を襲は只ゆう心胸を要す。

唐子 日本子 一様に子方とは云へ、唐れども、日本子は幼者、唐子は少年なれば、其相違を辨へて何れも赤調子高にはきときとあるべし。シテの心持に釣り込まれて可憐なる事を避け、唯に文句に依りて心の

ワキ 僧といふ程の匠をとらず、痛いかにも…

地 …

唐船 一

上臈樣はかけて附け、うとまるまトとキツパリ諦ひ、「既にうき身を」と選び辺み、「唐神日の本の」と哀今を外さず流ひ、さすが心もよわ〳〵しと眞を抜いて心持をつけ、これより誘めて流ひ止む。「ありがたの御事や、さこは舞ひ喜びの心にか〳〵りて調子も高く〳〵さらりと出て、「かくて飾りの城〳〵に」より引き立て、調やかに扱ひ、果の前にて住を祈む。幸月は調子好く来つて賜ひ〳〵と樂〳〵げに浮き立つ心なるべし。

辭解

箱崎 筑前國糟屋郡にあり。今の箱崎町の地。博多と共に支那朝鮮と往来の要津とし、て鎖国着後などをも置きたれば、ここに云ふ箱崎殿とは其守護又は地官の類なるべきか。**唐土と日本と** 我が國が古くより支那朝鮮と公私の往来を受けたる事多く、赤北條氏の時蒙古の来寇ありたるが如きは其顕著なるものなり。これらの捕虜が異法帰化居住したる例證も亦史上に乏しからずされば此曲に作る處は此事に想を撰へたるものにして固より實説ならざること推すちに難からざるも、特に南北朝の末期より足利時代にかけ、高麗の来寇或は唐寇の事頻出し、應永十二三年の交に東寺王代記、長陣國寶記等に見えたれば、或は此曲は是に暗示を得たる所洞陳物的創作なりしやも知るべからず。**祖慶官人** 記録をし、言ふまでも無く作者後作の人名なるべし。今箱崎宮の境内に祖慶の碑と称する古雅なる石塔を立し、古く筑前舊志等にも記されたれども、此謡曲以後に後人の附會したるものなること論無し。**十三回** 十三年・こゝに特に十三回と作れるは、支那に残されたる官人の子孫が、官人の生死不明となりし日を以て忌日と定め、面来陣事を叙みて年を送り、十三回忌に遠隔を尋ねんと思ひ立ちたる事とせん為なるべし。**野飼** 牛馬を野に放れ行きて草を食ませむること。**唐船の楫** 楫は船中の漕ぎ櫂なれば明中心とせたる故、四明山あるを以て名づくと唐言に見ゆ。海に沿ひ川多き地なれば明州の津、明州河とも作れり。されども唯と度を選びたるに源き理由ありとも思はれず。**明州** 今の浙江省寧波府。**そんし、そいう** 二人の子の後作名。孫子、孫由などの字にや。**賊船** 古く支那に海寇の雅多かりしかば、彼より賊を見て賊と呼ぶ。**思ひ立つ日を吉日** 俗に行はれし諺を引く。今も用ゐふことなり。**海漫々** 海の廣大無邊なる貌。白氏文集に「海漫々、直下無底」。**ほの見えて** ほのかに見えて。**心凡紫の果** 父達はんと心を立てしたる末といふを、凡紫の果に掛く。筑紫は元と筑前筑後一帯の古名なれども後に九州一圏の称となり。**忍び〳〵夫を** 背夫伴の秋手方、任部と伐ちに、九州松

浦潟を船出せし時、其妻侍用姫夫を慕ひ敷きて山に登りて領巾を振りし故事あり。これを引きて、其夫の帰朝を待つ意にて松浦潟に隠け、侍用姫の夫を慕ふ情を加りて、唐より父を慕ふ情を思はしむ。松浦潟は今の肥前松浦郡唐津湾の総名。**つまは夫婦何れよりも呼び〳〵古語。物詣** もの詣。野飼の使役を掌りて出へるなり。**のみなりありしとの心にて** 誘を七夕に轉ず。**七夕のたとへ** 七夕に祭らるる牽牛織女の二星を恋する男女に喩へたる歌など多きを云ふ。七夕のたとへは哀やかなる恋なれども、これは真の牛牽なれば、牛牽く里の名を我が身の上に其儘なりとなり。**草刈笛** 草を巻きて吹く假笛。草刈童などのなすこの笛の名あるに、其名着しき箱崎の松の老樹と云ひ、其殺のものに高麗直に高麗の産なり。**高麗、唐土** 朝鮮と支那と。時代と地方とに関係なく呼び〳〵總名なり。**ふたり** 箱の帰にて蓋の音を取り、前句一方ならぬに對せむ。**老木の枝は** 明暦以前の謡本皆『老木の松』とあり。古来歌に詠まれて其名著しき箱崎の松の老樹を老の身に喩へたるなるが、次句に雪降れてとあるため、徳川氏の松平姓に逆慮し、阿歌の徒が枝を枝に改ひ更へたるなり。**牛の聲々** 夫本物の歌『里近く山路のまはなりにけり牛の子を思ふ聲』の意を借る。**人倫** 人間と云ふに同じ。**華山に** 太平記に『馬を花山の陽に帰さず、牛を桃林の野に放たず』云々。これは書經の『帰馬于華山之陽、放牛于桃林之野』に出でたるなり。華山は今陝西省の南部、桃林は其東に在り。華山は古曲にて今慶安寺にて、桃林は其名桃の名所の如く作られ、桃林は其名桃の名所の如く作りたれども、實は二處とも要塞の地なり。**毛** 大小多寡の無論喜しき前。太平記に『大海の一滴、九牛が一毛なり』。**廣衣** 『きこに冠する旅衣』。廣衣は己をきす。**九牛が一** 箱崎の陸にあり。**今めかしき** 事新しき。**引きこ蹴ひて** 取り縋ひての意にや。されども寛永以前の謡本には皆『見苦しく〳〵ども面白はれべし』とありて此詞無し。これは古き時に物善無かりしを、後の樂の後舞を美しからしめん為、こと〳〵にて物善をかすことに従ある箱崎なれば云も明けて夢は宝〳〵ならんとなり。『春眠不覺曉』の古語を胸におきて巻宵に寝く。**春宵一刻** 蘇東坡の詩句『春宵一刻直千金』と、素素集の歌『あかねも黄金も玉も何せんにまされる宝子に〳〵かめやも』を取り合せて賜る。**心なき夷の國** 人情を解せざる夷の國。**隨喜** 佛法經典の語。こゝにては感ト喜ぶこと。

箱崎の神　福岡にある箱崎宮。應神天皇、仲哀天皇、神功皇后を祭祀す。**追風**（順風）**力なき**　よんどころなき。**天和撫子**　柔育なる幼兒を撫子、子の花に奇へ一聞もて、又撫子に唐撫子、大和撫子に奇へて文を綴る。**唐紅**　濃紅色。からの色を帶び、日本の人と見ゆれども、要するに共に唐土の血脈なる意と、子を唐撫子に、日本子を大和撫子に奇へて文を綴る。**薄くも濃くも**　唐土の人と見え、日本の人と見ゆれども、要するに共に唐土の血脈なりの意。

薄くも濃くも　既古今集の歌「撫子に取りつき別の意。前に呼ぶ子と立へるとすれば、人人わきて思ひ定めよ」に頼と取る。**とく〳〵**　腹を解くと成くに、ゆかわく。**たづき**　取りつき別の意。前に呼ぶ子と立へるとすれば、人人わきて思ひ定めよ。子島かきの際にて出す。此度海藻の際に拜かれたればなり。**身もかなしこつは**　身の二つあれかーしの意を基に、えひおけ、蓋　**燒野の雉子、夜の鶴**　共に親の子を思ふ情。太平記に「燒野の雉の子を命にて、雉を育む慈情に、鶴の子の親に栗をつくりて子を思ひつゝも、あかす**栗の蔭も**　共に栗をつくりて子を思ひつゝも、あかす。又、河内長の歌に「夜の鶴部のうちにこめられて子を思ひつゝも、鶴の子、自然記に出でたりと雖りて今音物語に載せ、栗に栗をつくりて子を思ふことにて引けり。蔭は多く栗に載せ親かを思ふ。**知らぬ**　定家の歌に「いけるせにそもしのみとあらんと思ふ、知らぬ人の命はとあらんと思ふ。**諸天**　もろ〳〵の天衆。太平記に「諸天善神　**十念**　念佛十遍すること。佛を念ずること。**御知見あれ**　御見あれとの意。神　**船子**　船頭　**さす手**　舟の手の櫂、長び書きて時さす手も知らず舟の時に金とのの意。**波の鼓**　波の音を鼓に見立つ。波の音を鼓に見立つ。**おーてる**　名産語。おーてるは波の強く吹き出でたる意にて、古くより難波の歌詞。**招くも遠風**　陸に出ずと雖ども、招く手風も、船に向ら遠風を吹くーての意。**帆をひきつれて**　大小の帆を引き列ねてといふ詞の意。上に長びて舟〳〵る袖の浦見も、共に舟子ケ浦を遠れての意を含ませ。

四番目

唐船　無事

子方　こんしきう（唐子二人）
子方　日本子（二人）
シテ　ワキ　箱崎神主

ものうよい者（早句）**は。九州箱崎の何某よてゝ。**

偖も一年唐土と日本と船の爭あつて。

日本の船をば。唐土の船

をば日本よ。留め置きてゝ。某も船を

一艘留め置きてゝ。其船よ祖慶官人

と申す者を。留め置きてゝ。はや十三

ナニ回ようろんも

回よ。ありい。某ハ牛馬をあまた持ちて
い程よ。かの祖慶官人よ申しつけ野
飼をさせい。今日も申しつけぞやと存ハ
唐土船の揖枕。夢ノ路程おき。名殘ハ尚
これハ唐土明州の津よ。そんーそいうと
申も兄弟の者ぞり。ハ。偖も我ゞ父官人ハ。
一年日本の賊船よてらちれぎのぶけふ

そハ思へども。十三回よはやぞりぬ。餘り
よよの戀ーさよ。未だ此せよまま
さで。今一度對面申さんと思ひ
三つ日を吉日て船の纜解きはじめ
明州河を押ー渡り。明州河を押ー
渡り。漫漫と漕ぎ行けぞ。はや日の
本もほの見えて。心筱紫の果よある

忍びて夫を松浦潟。浪路はるかよゆく
程よ。名のみ聞きし筑紫路や相崎
より早く著きよけり。箱崎より早くつきよ
けり。唐土の人のわたりいか
唐子（ワンシ）
これよ。祖慶官人未だ存生よ。相崎
殿より召しつかはしいより彩りの程よ。
數の寶より代へ連れて帰國仕るべき

ためよ。唯今此處より渡りて　すんば
祖慶官人が未だ存生よ。唯今物
詰よ。所出でい。暫らくそれよ御待ち
ゆ。所帰りゆ。
唐子（ワンシ）
すらばこれよ待ち申すぞそてい
一戸（シトサシ）
いうよあれるわらんべども。野飼の半
を集めつ。はやく家路よ急ぐべ

日本なる(三人)ものゝ業にて物憂けれ　よりわれ
のみゝ天の原　七夕のたとへも
似ぬ身の業の。牛ひく星の名を去
つゝき　日本なる(三人)花の野飼にて。老の
ゝ　秋咲くゝ
ゝゝ　これい唐土明州
の津。組慶官人と申す者あり。われ
圖らずも日本に渡り。牛馬をあつゝび

草刈笛の。高麗唐土をゝし名よのみ
聞きて過ぎゝ身のあら故郷恋しや。
かくて年月を送る程に二人のまを
持つ。又唐土にもこゝ人のまあり。われらが
事を思ふ時。それも恋ゝ。ゝとれも
いとゝ。一方あらぬ箱崎の。二人の
ゝもおかりせば　老木の枝い雪折

いてこの身の黒いいやらん（地上歌）あれを見よ。野飼の牛の聲ぐよ。野飼の牛の聲ぐよ。ゆゑよ物や思ふらん。

（下歌）

ほんや人倫よおいとをや我ぐ身あぐらも愚なり我ぐ身あぐらも愚なり。

いざや家路よ帰らんいざや家路よ帰らん（三人）いろよ御よ問めせ。さて

彩み給よ唐土よ。牛馬をば。飼よやらん

（下歌）

物語りよ。

（地上歌）

なるくなれや唐土の。華山よ馬を放し。桃林よ牛をつなぐ

（日本ヨ上）

これ花の名所なり

（三人）

さて唐土と日の本ぞ。どれ優りの國やらん。事く語り

（地上歌）

給へや

（地上歌）

愚なりとよ唐土よ。日の本を

（地上歌）

喩ふれば。唯今扇ぐ幸いそ行く。九牛ぐ

毛よ　日本任上　さほど楽しむ國ならば。痛を
しやさとそげよ。窓しく思しめさらめ
しやそよかたぐちをまうけて後に唐衣
帰國の事も思やぞて　地上　語り慰み
行く程よ。嵐の音のかすかきに松原や
末まるりぬらん箱崎よはやく著きよ
けり箱崎よはやくつきよけりいうよ

祖慶官人何とて遅く帰りてあるぞ
さんば餘りよ多き牛馬とて居屋の
程よさて遅く罷り帰りてあ　尤よ
てあ。又尋ぬべき事のあ隠さぬ申さ
べきか　これに人今めかしき事を承り
いものかな。何事ともあれ申し上げり
ぎるとてあ　備おとこ唐土よ二人の

ぞと持ちてあるらもの　子を持ちてあるう　さんばしを二人持
ちては　其名をそんーそいうと申さか
あら不思議や。何とて知りめされて
いぞ。やうよ申は　其そんーそいう。
出来だ存生の由を聞き。數の寶よ代へ
つれて帰國をべきためよ。唯今此處よ
渡りては　これは思ひもよらぬ事まして

いものかなとて　其船はいづくよ居座ぞ
此方へ来りゆへ。おれよりたる船
とそ。かの兩人の船とそゆへ　げよこれは
某が船とては　さらぐ對面ーゆへ
餘りよ見苦しくは程よ。引き儀ひて
給ちりゆへ　心得申は　物著　やあいうよ
あれある人唐土よ留め置きたる二人の

●小話

地柚子 細長く拾ふかも

者か　唐人すんば童出そんしそいうあり
これハ夢かや夢ならば　處ハ箱崎
明けやせん　●春宵一刻その價千
金も何ならぞ　程の寶よもあらじ。
唐土ハ心なき。夷の國と向きつるよ。ほ
の孝子ありけるよて日本人も隨喜
せり。たゞそや箱崎の神も納受給ふ。

唐船は　いろ申ハ。追風ありては急ぎお船よ
召されゆく　いろ箱崎殿へ申ハ。追風
ありては程よ船よのれと申ハ所暇申
ゆべー　早めでたりやどて帰國ゆく
日本は　あら悲しやわれらをも連れて所出で
ゆく　げよく出船の習ひてはたと
忘れてあるぞ此方へ帰りゆく　早暫らく。

祖慶宮人の事ハ分るき事。此幼き者
ども。此處にて生れ相續の者にて
程よりとまでも其召し使ひとりぎるにて
あるぞ此方へ来りゆく あら情なの
所事や。大和撫子の花だにも。同種
そて唐土の。唐紅より咲くものを。薄く
も濃くも花ハ花。情なくにてゆくとよ

唐土上 時刻うつりてかもあるまし。急ぎお船よ
めされよと。はやく纐をとく〳〵と
呼ぶもあれど。とりとむる中よ
そぐまる 父ひとり たづきも知らぬ
泣き居たり。身もかこつ箱崎のうら
めの心づくしや。たとへば。親の子を
思ふ事。人倫よりぎらぬ。焼野の雉子

夜の鶴。梁の燕も皆子や恋を物思へ
恋んやわれらさまきだよ。あまたも知
らぬ老の身のよゆ恋よ消えん命ハ何
なりくよ惜しからと今ハ思へど
そよかくよ船よも乗るまでとまる
まで。ぞいちよよあがりて十念し既よ
憂き身を投げんとも。唐土や日の本

のなどもハ左右よりつきて。これを
いうよと悲めぞさまでぐ心もよわくと
なりゆく事ぞ悲しき。よくく物
を案ずるよ。物の哀を知らざるハ。唯木
石よ異ならぬ。殊更出船の障あれど。
はやく暇とらまるぞ。そくく帰國を
急ぐべし。餘りの事の不思議さよ。

更よ眞と思やしぼ　こハそも何の疑
ひぞや。當社八幡も定知見あし。偽更よ
あるべからぬ。そくくく船よ乗り給へ

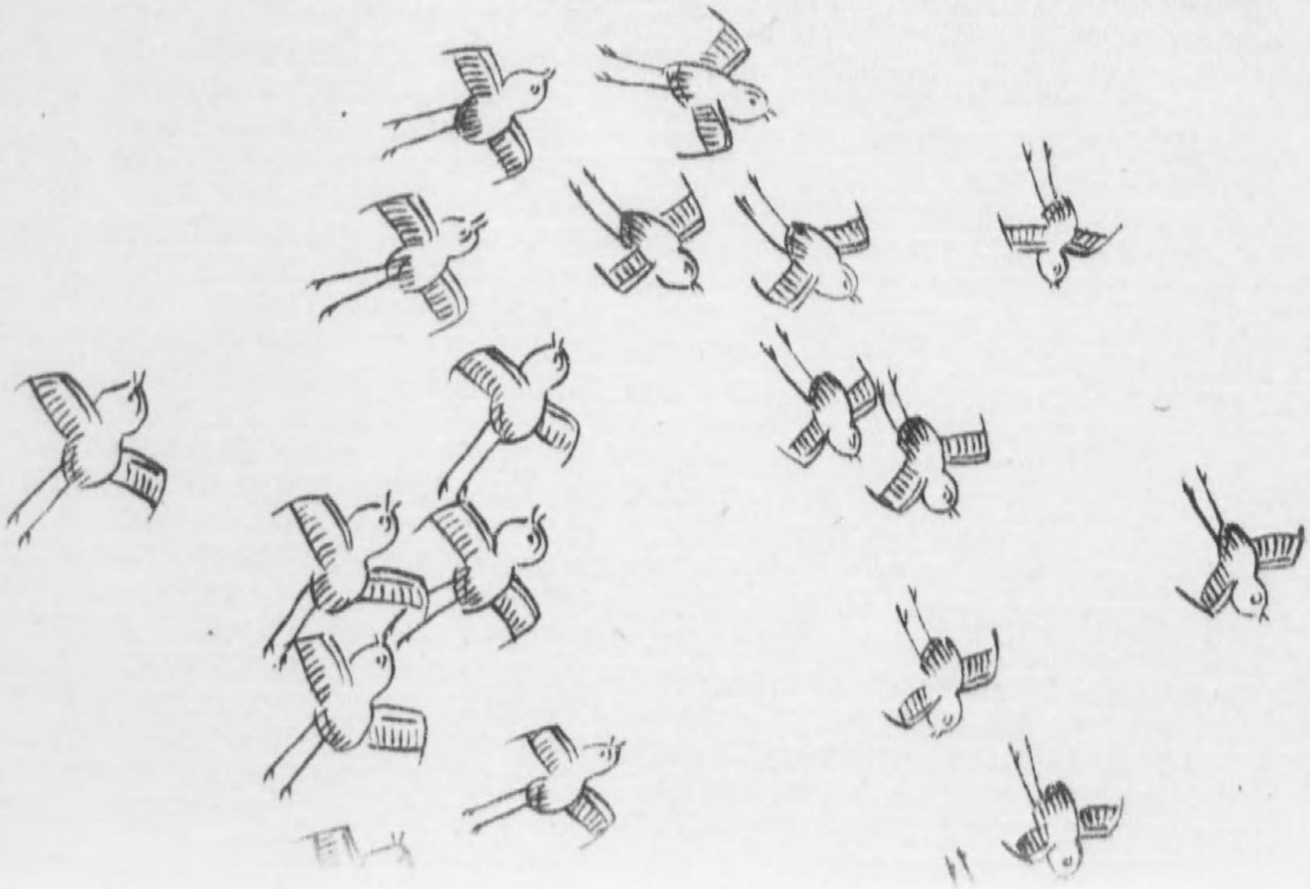
シテ上　これハ眞う　ワキ　なるくるよ　地　ありがた
の所事や。眞よ諸天納受して。此子を
われらよ與へ給へ　シテ　ありがたや。かくて
餘りの嬉しさよ。時刻を移さぬ。暇申

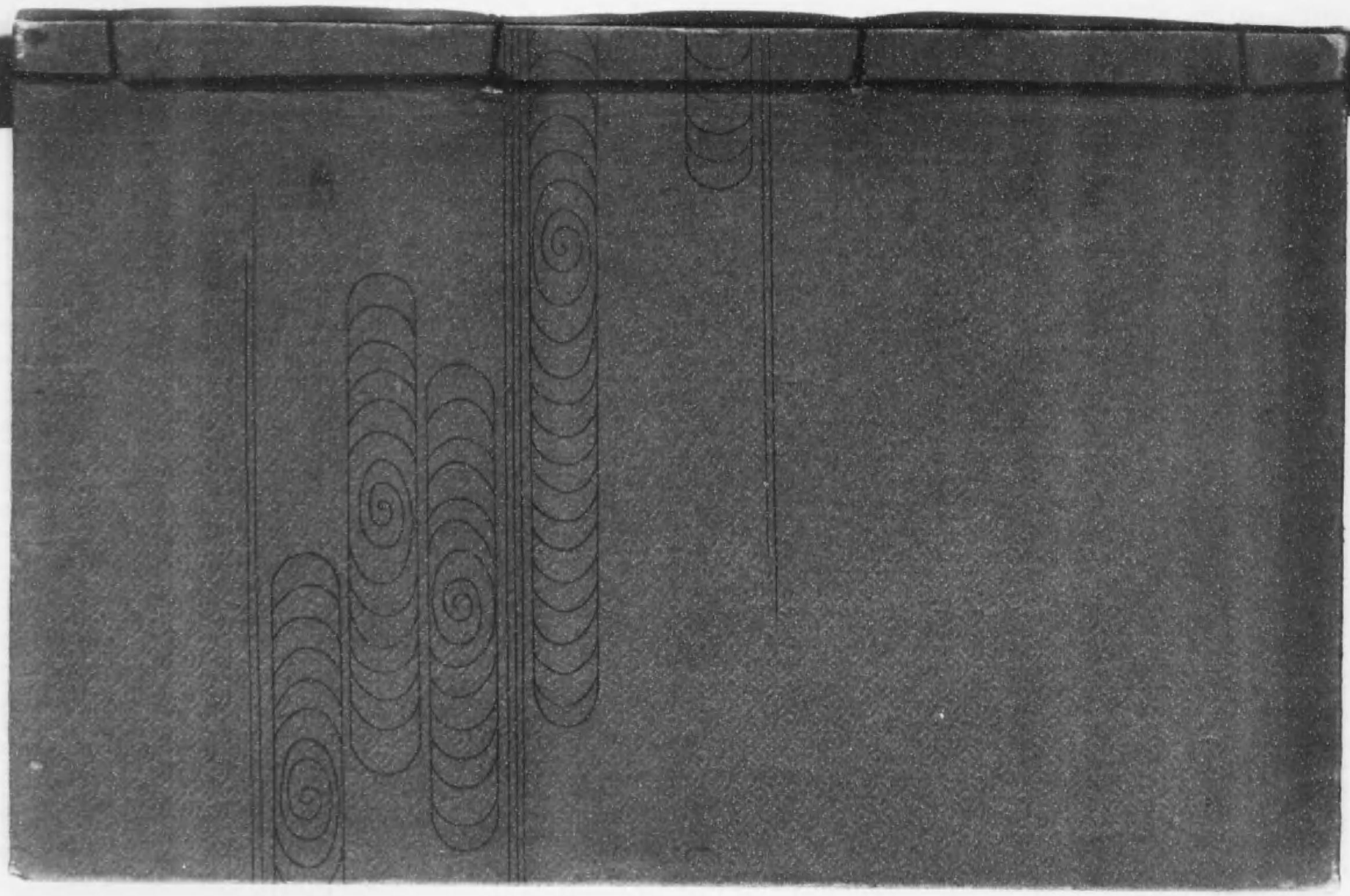
して唐人ハ。船よ取り乗りおし出ま。
喜びの餘りよや。樂を奏し船子ども。
棹のさま手も舞の袖をりから浪の
鼓の舞樂ようれて面白や　樂　上打延ル　壹よう
舞樂よ乗しつく。壹よう舞樂よ乗
しつ。名殘おしてる海づら袁遠くなり
ゆくまくよ。招く。風。船よう舞の。

紬の羽織も。鳥辺風とやらん。帆を引き
つれて。舟子ども。帆をひきつれて。舟子
ども。喜び勇みて。唐土さしてぞ急ぎ
ける。

大正十年十二月二十日印刷
大正十年十二月二十八日發行
觀世流改訂謠本
第四版・大正版
訂正者兼
相續者 丸岡桂
丸岡明
東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行者 土屋源太郎
東京市神田區東松下町十二番地
印刷者 鈴木彌作
東京市神田區東松下町十二番地
印刷所 信英堂印刷所
東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行所 觀世流改訂本刊行會
電話九段 二三〇五番
振替東京 一三四七五番

版權所有
許可なく複製を禁ず



CV
1/17

落